
輝く花

ジニー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輝く花

【Zコード】

Z3345W

【作者名】 ジニー

【あらすじ】

オリキャラ目線の物語です。時々違うキャラクターのもあります！

原作ほど奇怪な事件は全然ありません！

魔法＆友情＆ラブコメみたいな？

”闇再び”や”ジーモズボッターと隠れた罠”、”スコーピウスの日記”と出てくる登場人物が同じです。

内容も同じような感じかな？

～あらすじ？的なもの～

主人公は両親を亡くした日本人とイギリス人のハーフ、テレサ。愛知県の孤児院で暮らしてたけど、11歳の7月、ホグワーツからの手紙が届いた！

孤児院にはハグリットが迎えに来たり、ホグワーツ特急の中でアルバスやローズたちとも友達になつて！
そんなこんなで進んでいく、アルバス・ポッター時代の一次創作です！

是非、読んでください！

感想待つてます

プロローグ

いつもと変わらない、忙しい毎日。

それが成人になるまで変わらないと思っていた。

わたしと同じ境遇の幼い子どもたち相手に遊んであげたり、洗濯物を洗い、ご飯を作り、赤ちゃんの世話をし……

小学校に上がつてからずっと続けてきた孤児院での生活。

両親が交通事故で死んでからずっと住んできた孤児院。

それを離れて暮らすなんて夢にも思わなかつた。

幸せだった両親との生活が壊れ、一気に地獄へ落ちたわたしを救つてくれた孤児院。

先生たちも優しくしてくれた。

だから、色々働いてもとっても楽しかった。

でも……それよりももっともっと楽しむことがあるなんて。

たくさんの冒険と、樂しく面白い友達と毎日毎日話しながら遊び
るなんて。

今まで過いってきた単調な毎日を抜け出し、不思議で奇抜な毎日に
変わるなんて。

物語は11歳の夏。

あの不思議な郵便が来てから始まる・・・・・・

登場人物紹介（オリキャラのみ）

テレサ・シュレシンジャー

寮：グリフィンドール

杖：不死鳥の尾羽 サンザシ 28cm 良くしなる

目の色：茶色

髪の色：こげ茶

ペット：白フクロウ (アメリカ)

性格：誰にでも優しいが、引っ込み思案。心配性で読書好き。時々大胆に。好きなことになると興奮する。

父はイギリス人でホグワーツ卒、母は日本人でボーバトン卒。家族で交通事故に会い、奇跡的にテレサだけ生き残った。

如月カレン

寮：レイブンクロー

ペット：猫2匹 サン・ルナ

杖：ドラゴンの心臓の琴線 柳 26cm

性格：サッパリした性格。大雑把だが器用。頭がよく、運動神経も良い。

目の色：青緑色

髪の色：漆黒

父が日本人で魔法使い。母がイギリス人でマグル。

孤児院に居たが、1年ほどで引き取られた。

テレサとは孤児院のときに同じ部屋で仲良くしていた。

テレサより2年年下。

ドーセット・スリザリン

目の色・リングドウ色

髪の色・真っ黒

性格：明るい・うるさい・おしゃべり・ジョーク好き・怒りっぽい

ペット：黒猫 リングテール

杖：不死鳥の尾羽 カエデ 32cm

寮：レイブンクロー

スコーピウスに惚れてる

クライド・スリザリン

目の色・焦げ茶色

髪の色・真っ黒

性格：静かだけど勇敢、考えるより先に行動するタイプ

杖：ドラゴンの心臓の琴線 カシ 23cm

寮：グリフィンドール

ペット：アロウ バーンフクロウ

恋愛には今のところ興味なし

ドーセットとクライドは双子、ドーセットが姉でクライドが弟。2人の母親は蛇にかまれ、死亡。父親は双子をイギリス人でありながら、モン・サン・ミッシェルに連れて行き、父親は神父となつた。父親であるエドウイキングは双子をマグルとして育て、2人にはスリザリンが誰かなどのことは話さなかつた。しかし、父親は死に、双子は11歳となりホグワーツへ行つた。

アイリス・ライト

目の色：明るい青

髪の毛の色：白っぽい金髪

性格：何でも物事をはつきりと言つ性格。喜怒哀楽が激しく、涙もうろい。

杖：ユニコーンの尾の毛 楓 25cm

寮：グリフィンドール

ペット：豆ふくろう シリウス

本が大好き。好きな科目は呪文学

キヤサリン・ハーコート

杖：ユニークーンの尾の毛 桜 31cm

ペット：白猫 ハリザベス 毛はつやつやしていて長い。

寮：グリフィンドール

目の色・うす茶色

性格・優しく、いたゞといつ時いに案を出してくれる。

髪の色・じげ茶

ゲラート・カーター

寮・ハツフルバフ

杖・ユニコーンのたてがみの毛

椿 30cm

ペット・三毛猫 メーン

目の色・濃い青

髪の色・漆黒

性格・物静か・頭がいい

リサ・ウッドバーン

寮・レイブンクロー

ペット・メンフクロウ グレース

杖・ユニコーンの鬱の毛 くるみ

26cm

目の色・茶色

髪の色・栗毛

性格・おつとりしている。頭がいい

フレッドリカ・ニコライ

寮：ハツフルパフ

杖：ドラゴンの心臓の琴線 銀杏 30cm 頑固

髪の色：金髪

目の色：灰色

性格：自己中心的

スコーピウスが好きで、ドーセットを目の敵にしている。

ローテリオ・クレメンズ

寮：スリザリン

杖：ユニコーンの尾の毛 楠 32cm

髪の色：黒

目の色：黒

性格：意地悪

ドーセットが好き。

ロウアン・クリービー

寮：グリフィンドール

杖：不死鳥の尾羽 松 25cm

髪の色：プラチナブロンド

目の色：灰色

性格：悪戯が意外と好き

(クリービーの子供だが、以前はわたしで考えました)

ヘニコー・クアグマイア

寮：レイブンクロー

杖：ユニコーンの蠣の毛 29cm

髪の色：じげ茶

目の色：茶色

性格：物静か

登場人物紹介（オリキャラのみ）（後書き）

これから色々と増えていくと思います。

わたし、テレサ・シュレシンジャー 11歳。

愛知県の農村の小さい小学校に通っています。

そこでは末田テレサって通してるんだけどね。

8歳の時に、イギリスで両親亡くしちゃって□□の孤児院で住んでるんだ。

だから英語も意外と話せる。

孤児院では「ご飯を作つたりと家事をしてるけどシラ」と思ったことは無い。

先生もとっても優しいし、子どもたちも可愛だから毎日飽きないもの。

お父さんとお母さんと一緒に暮らしてた時には敵わないけど楽しく過ごしてた。

いつも一番先に起きるのはわたし。

パツと着替えて、みんなの朝ごはんの準備。

毎日、前の日に先生たちに言われたご飯を作る。

今日はお味噌汁ごはん、サケごはんとしたサラダ。

「おはよー。」やつやつ…

「おはよー。」

だんだんみんなが起きだしていく。

カタン……

いつも朝じはんを作つているときになる音。

郵便屋さんがポストに手紙を入れる時に鳴る。

わたし宛てには、カレンからの手紙くらいしか来ないけど…

カレンっていうのはわたしが口々に来てから1年だけ一緒に住んでいた、わたしの親友。

2年下だけどね

今日は誰に来てるかなあ

郵便受けを開け、中に入った手紙を取り出す。

ンと…草太くんと若葉ちゃん宛てに、蘭先生、かすみ先生、あかりお姉さん…最後は…あれ?わたし?

英語で書いてあるけど、そしてはちちゃんとTeresa Schuyler

esireと書いてある。

誰だらう？外国に知り合って居ないの？

ひっくり返してみると、口吻で糊付けしてあり、その上にライオン・
鷲・六熊・蛇が書かれていた紋章が描かれていた。

そこにはHogwartsと文字が入っている。

ホグワーツ？なんの名前だ？

開けると、分厚い手紙が出てくる。

「え？ Hogwarts School of Witchcra
ft and Wizardry？？？、魔法！？どうこう」と
「！？」

魔法！？

そんなのおとぎ話の中にしかないはず。

”ナルニア国物語”とか…

と、とにかくこれは何かの間違いだ…きっと、やつだよ…

誰かがふざけて送ったんだわ。

……これ、どうしよう…一応取つておこうかな…

「 ハレサカちゃん...どうしたの? 」

向ひからみんなの声が聞こえてきた。

ああっ...」ほん...忘れてたあ...

「 今、行きますつ...」

大男

それから数日後

いつものように学校へ行き、家事をして、遊んで…

手紙は引き出しの奥に仕舞われ、ほとんど忘れかけてた。

そんな時……

普通のノックよりはほど遠い、とてつもなく大きいノックが聞こえた。

中にいた全員が驚く。

「な、何・・・？」

わたしがみんなの気持ちを代表して声に出す。

「テ、テレサちゃん… お願ひ！」

あかねちやんが瞳をひるひるさせながらしがみつこいくる。

恐る恐るドアを開けてみる。

すると…

「…………」

目の前には空を見上げるよにしないと顔が見えないほどの大男が立っていた。

「あ…あ…あ…」

言葉にならない声が出る。

大男がわたしをジッと見て英語で話し出す。

「……テレサ・シュレッジャーちゃんのはㄇㄇに屈るか？」

ええつー? わ、わたし?

「えと…んと…あ、はい…わたしですか…」

「んにゃ…んじゃ上がらせてもいいな…」

大男がわたしを押しのけてズカズカ入っていく。

んもう…ホントなんのよー!

大男（後書き）

ハグリットの言葉遣いが分からん・・・

あーあ、みんな怯えひやつてるよ・・・

『ホラお前さんも・・・』

手をクイッと動かしわたしを呼ぶ。

・・・・・・・・・・・・

ちゅうじんと隣に座るわたし。

『IJの前來た手紙はもう読んだんか?』

『い、いえ・・・まだ、ですけど・・・』

『アレにはなあ・・・』

いきなり、ホグワーツとかいう学校の話を始める。

あとわたしのお父さんが魔法使いだった、とかわたしは魔女だ、とか9月1日から新学期だから。とか・・・

いきなりそんな言われても分かんない・・・

『わ、わたしが魔女・・・?』

『やつだ……じゃなきゃあの手紙なんぞここに来るわけ無いからなあ』

『は、はあ……や、そういうえば貴方の名前……』

『ん? 言つてなかつたな、そういうや……俺はハグリットだ。ホグワーツの鍵の番人と魔法生物学の先生をしあわる……この言葉前にも言つたような気がすんな……』

『や、それでハグリット……れん?』

『ハグリット、でいいわい』

『それじゃ、ハグリット……わたしは9月から違う学校に行くなことなの?』

『そー やつはひかや。まあお前さんが行きたくなかったら別の話しだが……』

『やつはひかや。』

『この生活も樂しこけど……』

新しいことに興へつて言つのも、結構いいなあ

「ね、ねえテレサちゃん?」の男は何なの?』

あ、忘れてた……

『のうと言つたら、わたし嫌われやうかな?』

でも・・・

「あのね、わたし・・・」

言われたことを日本語で説明する。

「・・・へえ！ テレサちゃん、行ひにきなよー。」

「え？」

「す」いねえテレサお姉ちゃん！」

「うんうんー 魔法だつていいなあ」

予想外の反応。

「ホントにー？」

「うんーす」いよーーー！ ロロ（孤児院）からそんな人が出るなんて・
・！」の誇りだわ！」

ちょっとと大袈裟のよつな氣もするが、こじまで賛成してもうえると
決心もつきやすいな。

『ハグリット！ わたし、行くよー。』

『オ・・ハリーの時よつは早いのオ・・・』

『ハリー？ 誰？』

『 いつか分かる・・・どこかで絶対戦にするからなあ 』

『 ふうん・・・それで、わたしどうすればいいの? 』

『 んー、明日からダイアゴン横丁の通りに歩いて準備するか 』

『 買い物するの? わたし、お金持つてないよ? 』

『 お前やんのお父やんとお母さんも魔法使いと魔女だ。グリンゴッソにやああるだら 』

『 ホント? なら、良かったあ 』

『 楽しいことが始まりそつー 』

夢？ホント？

次の日

スッと重い瞼が開く。

時計を見ると6時30分を指している。

- 10 -

いもと全く変わらない光景

あれは、おもてなしの精神

あふり、回るなし頭はけの言葉がクリクリ回る

いもの瘤でやうと着替える

心ねりごと欠伸をしながら下に隠りていく

せうじにシナレ 梦たゞたんた・・・

ギラ・サン お開 食堂 ソーハー 。。。。 い、 もと変わら 。。。。 し

ソフアードに緑色の大きな塊が動いている。

「・・・ハグリット!?

夢だと思った出来事の中でもう一度、以前を噛んでくる。

ホントに・・・ホント？

本当だつたんだ！！

だんだんと顔に熱が帯びてくる。

頭をブルブル振り、目をパチパチさせ、さらに擦つてみる。

それでも、ハグリットは田の前から届かなくならない。

そして、頬を抓る。

「痛つ・・・」

「やつぱり・・・やつぱり、夢じやない！」

どどどん顔が一やけてくる。

良かつたつ！！

夢?ホント? (後書き)

短い・・・

「 ～ ～ ～ ～ 」

鼻歌を歌いながら朝食を食つてゐる、みんながひびき起きた
へる。

「 おはよー・・トレサお姉ちゃん・・・・

「 おはよー・・

「 おせよー・・トレサちゃん・・・・

「 おはよー・・トレサちゃん・・・・

皆がクスクス笑いながらひつたを見る。

「 ? 」

「 トレスちゃん・・・トントン高ーねー」

「 え? トレスかなあー・・・

ま、自分でもやつと思つたるナビ・・・・

やつてゐてゐてゐる内にモソモソとハグリットが起きていた。

『ソニにや、テレサ早いなあ』

『おはようハグリット！』

h
•
•
•
L

『ホラ、ハグリットもー飯一緒に食べよつよーちゃんと作つたんだからねーー。』

ホオ、
ありかとなあ

ノ田ノ田と動きながらも椅子にドカンと座る。

壁でハンと手を合わせ、（ハクリットはハン！たゞたけど……）食べ始める。

「いつただきま～す！」

今日はトーストとスクランブルエッグ、ステップ。

みんながそれぞれ好きなものを食べる。

わたしとバグリツエヌーストから。

ハケツ

うわあ・・・ハグリッド、口元かッ！

1回で半分くらい食べちゃつたんじやない?

すつじょい・・・

わたしがポカソンと見ている間に全部食べ終わっちゃう。

周りの皆もあんぐりとしている。

皆の視線に気付いたハグリット。

『ン?』 といながら、こつちを見て次にわたしたちの手元を見る。

『食べるの遅いのオ・・・ そういうやあハリーたちも遅かったなあ、何でか?』

・・・ はい? 貴方が早いだけだと・・・

『ハグリットさんが早いだけですよー』

蘭先生がクスクス笑いながら言つ。

『 そうですよ、 とっても早いですね~』

かすみ先生も「 ハー」 笑う。

勿論この2人は大人なので英語は喋れるんだ。

こうして、楽しい朝食の時間が過ぎていった・・・・・・

朝食（後書き）

「こんにちは ハリーです

みなさん、お分かりの人は居ると思いますが・・・

蘭先生たちのお名前、名探偵コナン&らんま1／2&全開ガールから来ておりますw

ホントは犬夜叉も入れたかつたんだけど・・・名前が全員珍しいからねえ

蘭先生・・・名探偵コナン 毛利蘭

かすみ先生・・・らんま1／2 天道かすみ

あかねちゃん・・・らんま1／2 天道あかね

草太くん・・・全開ガール 山田草太

若葉ちゃん・・・全開ガール 鮎川若葉

蘭先生はあ彼氏居る設定w勿論、新一い！

で、なびきも一応居るよ

出てないけどね・・・

あかねちゃんは小学5年生で、乱馬くんは学校のクラスメイト設定！

良牙くんも居るw

そーいや、犬夜叉にも草太くん居たな～かごめの弟w

んまあ、めっちゃ適当な名前の付け方です！

では

行つてきます

『ねえハグリット・・・』

『ずーっと戻になつていていたことを聞いてみた。

『ダイアゴン横丁・・・だつけ? ニヒツ ロンドンなんでしょう? どうやって行くの?』

『そりや、アレだアレ・・・やつ、今日行くつて言われたけど、わたしパスポート持つてないしお金もないし。』

『そりや、アレだアレ・・・』

『ハグリットが指したのは・・・雑巾! ? それもボロボロの・・・』

『ぞ、雑巾! ?』

『アレになあ魔法かけて、ポート移動キーつづのひしたんだ』

『は、はあ・・・』

『1回触りやあ、どつかに飛んで行つちまつ。』

『すいねえ・・・でも、あれ今までにたつへん使つたよ?』

『昨日細工したばつかだかんな』

『じゃ、じゃあ他の誰かが触つたやつても大丈夫?』

『ホント?』

『ああ

『ホントのホント?』

『ああ』

『ホントのホントのホント?』

『・・・ああ』

良かつたあ

何か変な田で見られてるけど、まあいいや!

『もうすぐ出発だ。』

『分かったー!』

もうすぐかあ~楽しみ!

JRの畠とは永遠の別れじゃなくて1年に1回は会えるんだもんね。
上に上がつて蘭先生に借りたトランクをひきつづり出す。

うへ~つ重つ・・・

ウンウン言いながら降りてきたり、あかねちゃんが駆け寄ってきた。

「ね、写真……撮りつつ……」

キラキラの皿でお願いされる。

「うんっ……」

わたしが真ん中に立ち、周囲に皆が立つ。

「ハイツ、チーズ！！」

パシャッ

一瞬白い光に包まれる。

「ふう～・・・」

一瞬の緊張感から開放される。

「うわぁよく撮れてるー。」

真っ先に駆け寄ったあかねちゃんが嬉しそうに声を上げる。

「ホントだ！・・・テレサちゃん、この写真送るねー。」

「ホントーありがとー」

みんな・・・優しいなあ

「もうすぐ時間だ・・・」

「分かった！」

重いトランクを端から持つてくる。

「じゃあ、みんな・・・」

皆の顔を見渡し、ニコニコ笑いながら・・・

「行つてきますっ！――

「行つてらっしゃい！――

『テレサ、行くぞ・・・せーのっ！――

ハグリットの掛け声と共にボロ雑巾に触る。

その瞬間周りの景色が消え始める。

みんなが手を振ったのが見えた。

行つてきます（後書き）

いえい ハリーです！

次、やつとダイアゴン横丁・・・

早くホグワーツに行きたい・・・

ダイアゴン横丁

シンとこいつ音と共に周りの景色が見え始める。

田の前に田立たない古そうなババアだけ? がある。

「ハグリット……」
「ほん?」

「漏れ鍋つかけじだ。こいつからダイアゴン横丁に行くんだ。」

「ふうん……」

中に入り、奥まで進む。

そうしたら、レンガの壁に行きつぶ。

「……何にもないじやん」

そつそつとハグリットが、いつも持つてこる傘でトントンと叩きはじめた。

その途端レンガが動き出す。

そして、田の前にとっても賑わっている商店街? 的なものが見えてきた。

「うわあ…すうじこーー！」

それから、手紙に入っていたリストを見ながらロープや大鍋、材料、杖、教科書など色々買い占めた。

勿論、グリンゴッシでお金を出した後だつたけどね。

あのスッ「ゴイ早いトロッ」は怖かつたあ～…

あのハグリットまで顔が青くなつちゃつて…

今思い出すだけでも怖い…

杖はオリバンダーさんつていうところのお店で買った。

なんかね、不死鳥の尾羽にサンザシ、280円よくしなる…だつて。

この杖を持った時、指先がふわっと暖かくなつて杖から花火が飛び出した。

とっても綺麗だつたなあ

あと、ペットも飼う」とこしたんだ。

白フクロウのアメリカ。

とっても毛がふさふさしていて、それはそれは可愛いの！

そんないいなで僕はおひがし廻りを行つた...

ダイアゴン横丁（後書き）

次からどんどんグダグダになっていきます
(予告)

キングズ・クロス駅

そして待ちに待つ9月1日……

わたしが押しているカートが大きな音を立てる。

ああゝ重つ：

現在時刻は10：30。

出発時刻が11:00だから十分間に合うと思つんだがどうだ?

場所が、
分かんない

だって、9と3／4番線だよ！？

9はともかく3／4つて……

ハグリットは先に行くとか言って居ないし……

ゞ＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼

9と10の間で「ひめよ」といふと、男女2人組に声を掛けられた。

「もしかして、ホグワーツ？」

「え？…あ、はい…」

「もううなのーあのね私たちもなの。私、データシート。こいつはクラ
イド。よろしくねー！」

「わ、わたしテレサ。よろしくお願ひします…」

「固くならなくていいのーテレサ、1年生でしょ？私たちもそりだ
からー！」

「う、うん…」

「姉ちやん興奮しますわ…」

クライドが困ったよーニードセシートを睨みながら囁く。

「はいはい…ホラ、早く行けりゃよー。」

「で、でも行き方分からなくて…」

「あ、分かんないの？あのね、9と10の間にある壁に向かって走ればいいんだって。魔法使いなら通り抜けられるんだよ！」

「うつむく…

「じゃ、クライドが一番ね！頑張って～」

はあ…と溜息をつきながら呆れたようにクライドが言つ。

「姉ちゃん、テンション高いぞ。」

「いいじゃんいいじゃんーホラ、早く行きなさいよ」

「分かったよ」

そうこうと、恐れた様子でもなく壁に向かって突っ走り始めた。

ぶつかる…と思つた瞬間クライドの姿がヒュウッと吸い込まれる。

「わおーすいーーー！」

ドーセットが田を輝かせながら言つ。

「次はテレサ行つていよい！」

「わ、分かった…」

カートの握るとこをギュウッと握りしめる。

テレサ！覚悟を決めなきゃダメよ！

… よしつ

タンタンタンと壁に向かつて走る。

もつ後戻りはできなー。

どんどん壁が近づいてくる。

ぶつかるー！田を瞑る。

…衝撃が、ない？

田を恐る恐る開けると、田の前には紅色の汽車が悠然と止まっている。

本当に通り抜けたんだ。

「ふへへっ怖かったあ

すぐ後からきたドーセットが一匹一匹しながら叫ぶ。

その時。

「ドーセットークライドーーー！」

2人を呼ぶ声がした。

「あ、アルバスたちだわ。」

「テレサ、向こうで会おうなー。」

手を振り振り呼ばれた方に去っていく。

ああ良かった！

学校にもついてないのに友達が出来ちゃった。

時計を見ると出発まで15分。

あ、汽車にこの荷物乗つけなきや。

カートを押しながら、汽車に近づく。

キングズ・クロス駅（後書き）

ホントは1章で済ますハズだったんですけど…

ホグワーツ特急

重いつ

何て重いの、コレ…

色々と入っているトランク。

持ってきたのもカートに入れたのもハグリット。

うわ…ビーしょお

本日2回目の”ビーしょお”

うんうん唸りながらトランクを持ち上げようとしてると、年上の男の子が声を掛けてくれた。

「君、大丈夫かい？」

「あ…」

「すつごい重そうだなあやつたげるよ」

「え、あ、ありがとつぎやこます…」

わたしが悪戦苦闘していたトランクをギュウッと持ち上げ汽車の中に入れてくれる。

「ありがとう…」

「これっぽりい軽いもんだぜ」

なんか楽しそうな人だなあ優しいし…

「僕、ジエームズ・ポッター。君は?」

「テレサ・ショーレッシングジャーです。」

「へえ～テレサね。よろしく!…テレサ新入生だろ?僕の弟も今年1年なんだ。コンパートメント来る?」

「いいんですか?」

「勿論!たくさん居るけど大丈夫だよね?…あと、敬語は要らないからさ!」

「は、はい…じゃなくて、うん?」

「OKOK!」

ポ～～～～～～

汽車の汽笛が鳴り響く。

ドアがガタンと閉まり、ゆっくりと走り出す。

外から別れを惜しむ親たちの声が聞こえる。

「えいや、行くぞ」

ジャームズが歩き出す。

そのあとをチラチラと着いていく。

うわあ、すっごいなあ…

日本じゃこんなのが無かったもん。

へえ~

キョロキョロ周りを見ながら歩いていると、ジャームズの弟が居る
つていうコンパートメントに着いたみたい。

「エリなんだけど、丁度カートが来てるから待つとこで。」

「うそ。」

『お菓子いらないかい?』

『チラチラーフロッグジーちよーだい…』

『何故に31-1なの?』

『1日に1個食べるためには決まってるじゃないか!』

『……ねえ、9月つて30日しかないと毎日がビヘ…』

『…ガーン!』

『プラス、カビると思ひよ』

『……ガーン!…』

面白い会話が聞こえる。

クスクス笑つていると、ジョームズが呆れたように言つ。

「”ガーン”のヤツが僕の弟さ。アイツ、馬鹿だから
はあと溜息をつき、ドアに寄りかかりカツコつけながら話すジョー
ムズ。

「アルももう少し頭を使えたらな…フツ」

「あ、ジョームズ!」

「…アレ?後ろの娘誰?」

「あー…テレサじゃない!」

口々に言われる中、名前を呼ばれる。

「…ジョームズと知り合い?」

「…」

「まあ、さつとき会つたんだ」

すると、中にいた女の子の1人がニヤッと笑いながら小指を立てる。

「もしかして…「コレ?」

…………はあつつつー?

「ち、違つわよおーー!」

「アレ?と思つてきり否定すると」これが怪しきなあ」

「んもひーー。」

その間、中にいた男子4人とジムズから1人を除いて”?”と言つてゐる。

”?”が出ていないのはクライドだけ。

双子のお姉ちゃんが居たら、流石に知つてゐるわよねえ

女子3人がわたしをからかいまくつていふと、クライドがボソッと言つた。

「…姉ちゃん」しかも、スコーピウスに一目惚れしたくせに…」

「それは認めるわつー!」

「「「」」」

沈黙に包まれるコンパートメント。

そんなにハツキリ言ひちゃあ、ねえ？

真つ赤になつてゐるフーラチナブロンズの子がスコーピウス、ね。

チョコを両手に抱えてるのがアルバスかな？

「…ね、ねえ…みんなはどこの寮に入りたいの？」

れつき一番最初にわたしをからかい始めた女の子が聞いた。

「私はレイブンクローかハツフルパフかなあ…でも、家系的にスリザリンに行つちゃうと思うけどね。そういうリサはどうなの？」

ふむ、あの子はリサね。OK。

「私は、うーん…私もレイブンクローかハツフルパフかなあ？」

「僕はグリフィンドールだな、入りたいのはね。でも姉ちゃんと一緒でスリザリンだと思うな」

クライドも買つたお菓子を頬張りながら言つ。

次に赤毛の女の子が言つ。

「私は絶対グリフィンドール！」

「まあローズはそうだと思うな、ウイーズリー家は皆グリフィンドールだし。」

赤毛の女の子はローズ。

「僕は、やっぱりレイブンクローに入りたいけどね……父さんは絶対にスリザリンだって言い張るしな」

スゴーピウスも囁く。

「アルは？」

「僕は……グリフィンドールがいいけど、スリザリンでもいいかなって思い始めてるところかな」

「……」

みんなビックリしている。

「さつき、父さんに聞いたんだ。僕のミドルネーム”セブルス”っていうだろ？それ、スリザリン出身の校長先生から取ったんだって。でも、その人は父さんが知ってる中で一番勇気のある人間だったって……」

「……へえ、すごい名前なのね」

しみじみとドーセットが囁く。

「ま、とにかく僕はグリフィンドールかスリザリンだな

「テレサは？」

クライドが話を振ってきた。

「わたし? …わたしは、グリフィンドールかな? やっぱり。性格的にはハッフルパフに行きそんなんだけど。… ジェームズはどこの寮なの?」

「僕とフレッドは、グリフィンドールさーーの中からも誰か来るだろ? ね」

そんな調子で時間が過ぎて行つた…

ホグワーツ特急（後書き）

ひえ～！

次、事件発生です w

事件発生！？

「着いたみたいよ

リサが窓の外を見ながら言つ。

ガタン

汽車が止まる。

皆が外へぞろぞろと出て行く。

外に出ると、ハグリット級に大つきな人が「イッチ年生！イッチ年生！」と叫んでいる。

「俺たちはコツチだから、向こうで会おうな！」

フレッドがジエームズの腕を掴んで、去っていく。

辺りはもう真っ暗でとても寒い。

「寒いわねえ……」

「そうね……」

腕を抑えながらドーセットが言つ。

「「」からボートだ！8人ずつで乗つとくわ」

男子3人（アルバス、クライド、スコーピウス）と女子4人（ドーセット、ローズ、リサ、わたし）プラス男の子一人。

「ボートって初めて！修道院で育つたから乗つたことなんて無かつたし…」

ドーセットが興奮したように叫び。『

「修道院で育つたんだ！…親はどいつしたの？」

「……どつかでお星さまになつてゐるわ…」

ドーセットもなんだ…

「…そつか、『メン』」

「でも、わたしもそうだつたよ」

慰めるように叫ぶ。

「え？ テレサも？」

「うん。8歳の時に事故でね…一応わたしも巻き込まれたんだけど、お父さんとお母さんが魔法使って助けてくれたみたい…」

「そうなんだ…」

女子の雰囲気がぐらーくなつた所で、スコーピウスが唐突に言い始

める。

「今日さ、僕父さんと喧嘩したんだ。……父上」と呼べ。だの純血以外とは仲良くするな。だのポッターたちには声を掛けるなとか…アルバスたち、いい友達なのにさ」

「純血？…何か関係あるの？」

リサが不思議そうに聞く。

「さあ？良く分かんないんだ。」

はあ～とため息をつくスコーピウス。

「そう…貴方のお父様にも何か考えがあるのよ。彼が純血結婚を願うのならそつなるかも知れないわ。でも、貴方が自由な交流を願えばそんな未来になるかも知れない。この世界は全て神の意志で働いてるの。運命がどうなると、それをきちんと受け入れればいいのよ。」

ドーセットが優しく言う。

キリスト教を知らない人も癒された気持ちになる。

「ドーセット…君、とっても優しいんだな」

「そう？…ありがと」

「ええっ！？姉ちゃんが優しい？…そんなわけないじゃないか！」

クライドが雰囲気をぶち壊す。

「アーティクル・マガジン」

「だつて、なあ？」

「クラウドツール」

姉弟喧嘩が始まる。

そこへ、乗り合わせた男の子が声を掛けってきた。

「あのう…お取込み中悪いんだけど、もしかして、ポッターさんだ
つたりする?」

「え？ そうだけど」

アルバスが答える。

うわあ！スッゴイ！…僕、ロアン・クリービーと書います！」

「クリービー? もしかして、コリン・クリービーさんと関係があるの?」

お父さんから聞いたことある名前だつたから。

友達だつたんだつて。

「うん。僕の伯父さんだよ、那人。あの戦いの時に死んじゃったんだけど…」

あのさ！僕、父さんから聞いたんだけどさ、こここの湖落ちると大イ力が助けてくれるんだってさ！すごくない？…やつてみる？」

キランと男子の目が輝く。

…もしかして

「やりたいっ！！」

「おおむね一.
」

「やめてやめなー！」

「私たちはイヤだよ！！」

「聞いてるのー?」

女子の講義も空しく、男子4人はボートを揺らしていく。

れえ

しかし
男子たちが聞いているわけもなく……

とんとんと揺れか大きくなる

縁を掴んでないと飛はざれそ、なくらへ

「それ！」

誰かが掛け声を出す。

その瞬間揺れがいきなり大きくなつた。

したがって今まで精いはいたが力が限界に達し

当然の如く女子4人の裸体はホールの外へ投げ出される。

盛大な悲鳴が迸る。

ハッシャーーン！

- ああ、！

男子の1人が声を上げたのか聞こえた

口の中に水が侵入していく

卷之二十一

身体がどんどん沈んでいく

誰か、助けて……つ！

バ
シ
ヤ
ン

男子4人が水の中に飛び込んだ。

スコーピウスはドーセットの方へ。

クライドがローズの方に。

助けに叫つてゐる姿がうつすらと見える。

その時、両手を掴まれた。

アルバス！ロウェン！

身体が引き上げられ、顔が外に出る。

「ふはあっ！」

思いつきり息をする。

まだ心臓が波打つてゐる。

死ぬかと思つた

「ゴメンっ！」

「僕たち、全然考えてなかつたよ」

2人が申し訳なさそうに謝る。

「ううん…大丈夫…ありがとね」

周りを見ると、ドーセットもローズも引き上げられている。

良かつたあ……つて！

「リ、リサは……？」

「え？……ホントだ！ 居ない……」

向こうの2組も氣付いたようで、キヨロキヨロしている。

“ガ”“ガ”“ガ”“ガ”“ガ”“ガ”…

いきなり地響きが鳴り始める。

水が盛り上がり、大イカとリサが上がつてくる。

ひええつ！

「リサつ……」

ローズが叫ぶ。

声が出ない。

…何かするつと思つたんだけど。

リサをボートに乗せて、帰つていつた。

良かつたあ……

皆が助かつて、ホツとした途端意識が薄れてきた。

「テレサ！？」

アルバスの呼ぶ声とロウアンの焦つた顔で記憶は途絶えた。

「Mr・ポッター！ 貴方はお父様と同じです。ちゃんと周りのこと
も考えるようにな！」

Mr・マルフォイ！ 貴方のお父様よりはましだですが…人に迷惑を
かけてはなりません！」

Mr・クリービー！ 変なことを皆に吹き込まないでください！」

Mr・スリザリン！ 周りの流れに乗つて悪いことをしないように
！」

女の先生の怒鳴り声で田が覚めた。

田を「すりすり起き上がる。

「テレサ！」

「大丈夫？？」

データセットたちが心配そうに駆け寄ってきた。

「ああ、Ms・シュレシンジャー。大丈夫ですか？」

さつきまで怒鳴っていた先生が表情を和らげて優しそうに聞く。

「あ、はい…」

そう言いながら、男子たちの方に目を向けると4人はバツの悪そう

に顔を見合わせる。

「もうすぐ、組み分けが始まります。早くホールへ行きなさい。」

そろそろと部屋から出る。

そういえば……服が乾いている。

あんなにビショ濡れになつたのに……

聞いてみたら、あの先生が魔法で乾かしたんだって。

「ね、あの先生って誰？」

「ホグワーツの校長先生で、マクゴナガル先生っていうんだって。」

「へえ……ね、ローズ」

「ん? なに?」

「あのさあ……」

女子たちが談笑していると前で黙りこくれていた男子組が「あのう……」と気まずそうに声を掛けてきた。

「? ?」

「その……ゴメン」

上目使いで謝る4人。

「ううん…全然大丈夫だから…」

ドーセットが明るく言つ。

「そーね、ちょっと怖かつたけど…」と、ローズ。

「スリル満点だつたし！」と、リサ。

「今思い出すと意外と楽しかったかも。」と、わたし。

「それにこつちはお礼言わなきやいけないくらいだし。」

「助けてくれたもの！」

「結構カッコ良かつたわよ！」

「そうそう…ヒーローって感じだつたあ」

キヤイキヤイ言つていると、4人は救われたように笑つた。

その笑顔につられて、わたしたちも笑顔になる。

「それより早く行かなきゃ」

8人で走り出す。

組み分け帽子

現在は組み分けの順番待ち中。

わたしはうだから最後の方なんだけど…

正直言つて、もう緊張します…

この8人の中で1番最初はロウアン。

2番目はスコーピウスで、アルバス、わたし、ドーセット、クライド、ローズ、リサと続く。

「クリービ・ロウアン！」

ロウアンの名前が呼ばれた。

ロウアンがビクッと揺れ、おずおずと前に進む。

「……………グリフィンドール…！」

30秒程沈黙した後、帽子が叫んだ。

グリフィンドールの席から割れるような拍手が聞こえる。

ロウアンが嬉しそうに走っていく。

「クレメンズ・ローテリオ！」

なんかスッゴイ威張つてそんな男の子が来た。

帽子を被つて約1秒。

「スリザリン！！」

帽子が叫んだ。

…早すぎませんか？

「マルフォイ・スコーピウス！」

スコーピウスが帽子を被る。

……………

たつぱり3分間。

「…………レイブンクロー！！」

ええつ！？

ホールがざわめきに包まれる。

あのマルフォイがスリザリンじゃない寮に入つたからだろう。

スコーピウス自身も驚いている。

すると、隣から拍手が聞こえた。ドーセットだつた。

「スコーピウス！ 良かつたわね！！」

それを見て、順番待ちに居る5人と、フレッド・ジョーマズ・ローアン《3人》も拍手を始める。

そんなわたしたちを見て、スコーピウスがフツと笑った。

「二二二ライ・フレッドリカ！」

ニヤニヤ笑いの女の子。

なーんか、わたしは美しいのよ
だなあ
つて感じの子。…苦手な感じの子

被つて10秒。

「ハツフルパフ！！」

帽子が叫ぶ。

そのフレッドリカつて子が変な顔をしながら言つた。

「レイブンクローが良かつたわ…初めてよ、こんなこと…」

何が初めてなのかは分かんないけど、なんとなく予想がつく。

お嬢様らしい感じだしね。

やつぱり、苦手なタイプだわあ

「ポッター・アルバス！」

アルバスの番だ。

ゴクッと1回唾を飲み込み、前に向かうアルバス。

帽子を被る。

1分・・・2分・・・3分・・・4分

「…グリフィンドール！！」

ホツと安心したアルバスが席に走る。

「クアグマイアー・ヘニワーー！」

前に出てきた男の子を見てクライドがアッ！と声を上げる。

「アーヴィ、あの事件の時」「リサ」「手錠をしたヤツだぜ」

「ふうん…」

リサが驚いたように上へあがつた男の子を見る。

「…レイブンクロー…」

「シユレーシンジャー・テレサー。」

「わ、わたしまあ…」

選ばれなかつたら…『ひつよつ…』

そんな不安が今頃になつて出でてくる。

高ぶる心を押し付けて、帽子を被る。

『ふう～む…このトナビ…』へ入れよつか…やうだな…』

「…グリフィンドール…」

…やつた！

入りたかつた寮に入れた！

意氣揚々と席に走る。

皆が二二二二と迎えてくれた。

「スリザリン・ディセシトー！」

一瞬でホールがしーんと静まる。

その静けさも気にせず、毅然とした表情で壇上に上がるディセシト。

なんか、かつこいー…

帽子を被つて約1分。

「…レイブンクロー…！」

スゴーピウスの時と一緒にホール内がざわめきに包まれる。

そんな中、ドーセットは二二二二とレイブンクローへ向かう。

「スリザリン・クライドー！」

ホール内がまたシーンと静まる。

(もう一人居るのかよー)

が、みんなの心情だと想つよ

クライドもまた約1分。

「……グリフィンドール！！」

わたしたち10人の拍手以外、何も聞こえない。

（レイブンクローはともかくスリザリンの宿敵のグリフィンドール
！？）

ホール内の心情が統一されたであるつ、瞬間。

「ウイーズリー・ローズ！」

ローズが上る。

彼つて10秒。

「……グリフィンドール！！」

キラキラの笑顔でこっちに来るローズ。

「ローズ、良くなつた！」

フレッドが二口一口しながら囁く。

「ウッドバーン・リサ！」

帽子を被つて、30秒。

「レイブンクローーー！」

「一二三」と走るリサ。

「お～、レイブンクローとグリフィンドールに分かれたな。」

クライドが面白がりに囁つ。

そして最後の1人。

「ライト・アイリス！」

トタトタと上に上がり、帽子を被る。

約1分。

「…グリフィンドール！！」

アイリスがこっちに走つてくる。

マクゴナガル先生が出てきた。

「さあ、宴を始めましょー！」

状況説明(?)

9月1日から何週間も経ち、寮の同じ学年の友達とも仲良くなつた。

メンバーはトマス・ボーンズ、ラベンダー・ガーゴイル、レイチエル・ゴーント、ダニエル・グラム、ジャニュミ・リングティル、アイリス・ライト、アルバス・ポッター、ローズ・ウイーズリー、ローウィン・クリービー、クライド・スリザリン、そしてわたしテレサ・シュレッジャー。

みんな優しくて面白くてすつごい楽しいよ

特にアイリスはドーセットと親友なんだつて！

だから、よく一緒に居るんだ。

そしてグリフィンドールに入ったわたしたち6人は仲がいいことで結構有名。

あと、レイブンクローの3人も。

先生の話だとあの3人組の人数が増えたバージョンみたいだ、とのこと。

あの3人組つてのは、教科書に載つてたハリー・ポッターさん、ロナルド・ウイーズリーさん、ハーマイオニー・グレンジャーさんだつて。

すつじい有名なんだよ！魔法界を守つたとか何とか…

しかも、アルバスは名字の通りハリー・ポッターさんの息子だつて。ローズの両親がロナルド・ウイーズリーさんとハーマイオニー・グレンジャーさんなんだつて！

あー、スゴいなあ……

楽しかつた授業は”闇の魔術に対する防衛術”と”呪文学”。

飛行訓練では、アルバスがめちゃくちゃ上手かつた。

スコーピウスもまあまあだつたんだけど、アルバス級はアルバスのお父さん以来なんだつて。

あと、アメリカで孤児院のみんなと手紙交換もしたよ。

ハグリットはアルバスたちと知り合いだつたから時々お茶したりしてるんだ。

ハグリットが時々言つてた”ハリー”つてハリー・ポッターさんだつたんだなあ

あ、そういえばジョーモズと同じ学年の子にキャサリンつていう子が居て、すつごいしつかりして、ジョーモズとフレッドの悪戯を止めてる女の子なんだ。

頭も良いし、憧れるなあ

そしてスコーピウス。

元々両親と喧嘩中だったのに、レイブンクローに入っちゃったから
冷戦状態だとか…

デーヴィットとクライドは…

スリザリンって名字なのにレイブンクローとグリフィンダールに入
ったから、すいっし（？）小言を言われてたんだけど、

クライドは無視して、プラス苛められてた子を助けるといつ行動を
したからすぐには無くなったんけど…

デーヴィットは長くて綺麗な黒髪に清楚な容姿で、女の子からの嫉妬
がすごいんだって。

それに、色々反応しちゃつから、まだ続いているみたい。

だから毎回スコーピウスとリサが止めてるんだって。

そんなこんなで楽しくやつてるんだ！

状況説明（？）（後書き）

はい、会話既無！

あと、後でプロローグのあとに登場人物紹介書くつもりなので。
オリキャラのみ

喧嘩！？

そして、現在：

授業が終わり、6人で話しながら歩いていると……

「スコーピウス？」

たつた1人でとぼとぼと白い顔を更に白くした顔で歩いている。

「スコーピウス？ どうしたんだ？」

アルバスが聞く。

「あ、アルバス……え、あ、いや……何でもない……」

明らかに何かありそうな顔で言つ。

「そりかあ？ ドーセットとリサは？」

スコーピウスがビクンと揺れる。

「……1人で散歩してるだけだから。」

「……答えになつてませんが？

「そーは見えないけど……」

「ホントに何でもないからシ……じゃな

なんか最後、ヤケになつて叫んで去つていつた。

「……ぢつしたんだ? アイシ…」

「さあ?」

「誰が見てもあれはおかしかつたよね

「うふ、同感」

「ジー・セ・ジ・トたひと何があつたんじやない?」

「ええ~ まさかあ

「んま、アイシはアイシなりになんかあつたんだる。行こーぜ」

「ほーこー。」

寮に向かつて歩き出す。

曲がり角を曲がる。

誰かとぶつかつた。

「ん…」

「……あひ、『メンなさい』……つ、ヒードーセットへ。」

「……トレスカあ……みんな……」

綺麗な瞳むなに涙が溜まつていぐ。

「ジ、ジーセットー?」

「うわあ～～ん………」

『セーフィー』が飛びついてくる。

「じひしたのー!?

大声で泣く『セーフィー』。

みんなが困ったように顔を見合わせる。

広い廊下に、『セーフィー』の泣き声だけが木靈する。

何分か経ち、『セーフィー』が落ち着いてきた頃。

何で泣いていたのか、1人で歩いていたのか、理由を聞いてみる。

「ね、どうしたの？」

俯きながらドーセットがポツリ、ポツリと話し始める。

「あのね…スコーピウスと喧嘩、したんだ…」

え～テレサたかこがデータセシト視点で話してるので、最初テレサたちが聞いた話と「コレはちょっと違います。

「…あのね、スコーピウスと喧嘩、したの…」

衝撃の告白。

「ええつー…？」

「…だからアイツも…」

「私が…悪いの。…だつて！」

時と場を変え、ここはレイブンクローとスリザリンの合同授業の後。

「やーい、スリザリンー！」

スリザリンの男子たちがドーセットをからかう。

「狡猾さの欠片もないスリザリン」

「ギヤハハハハハハハハハ！」

変な歌まで作り始める。

女の子の気を引くためである、この年齢にある行動である。

——ああ！！靴にスリザリン大好き！って書いてあるぞ！！」

「ええつ！？」

今まで無視していたジーゼットが驚きながら鞄を見る。

お腹を抱えて笑う調子。

「￥￥￥￥￥￥￥￥￥￥￥￥￥」

顔を真っ赤にして剥れるドーセット。

「おいやめんなさい。」

スコーピウスが庇う。

「え？ マルフォイ家の癖してレイブンクロー入ったヤツが何言つてるんだ？」

スリザリンの代表格、ローデリオが言つ。

わざ今まで一いやいやしていた男子たちが一瞬でどす黒い（！？）顔

に変わる。

しかし、ドーセットがキッと睨みつけるとまたもや一ヤ顔に戻る。

まだまだからかには終わりそうにない。

ドーセットトリサはボーッとしながらそれを聞き流す。

「ハーサイ、スコーピウス！」

フレッドリカが何故か入ってきた。

「ね、ドーセットなんかどじやなくて私どじと一緒にしない？」

「……」

「アラ、ドーセットのことはなんて気遣わなくていいのよ。本当は私と一緒にしたいんでしょ？…やつぱりそうなのね！まあそうでしょうね、ドーセットのあの髪一真つ黒なんて…まるで悪魔みたいだわ。私のこの綺麗な金髪のほうがよっぽどこにわ…ドーセットなんかと居ると、貴方まで印象悪くなるわよ！」

身をくねくねさせながらフレッドリカ。

(「くつ、気持ち悪ッ…」)

内心そういうながら適当に対応するスコーピウス。

「で、でも僕は…ドーセットのこと好きだし…」

ビビンスコーピウスの頬が赤くなつていぐ。

すると、突然フレッドリカがスコーピウスの右手を掴み、両手で抱きしめた。

「はあつー? 何すんだよ!」

その時、フッドリーセットがスコーピウスを見た。

目を見開く。

プチッという音がした。

「…リサ、帰るよ」

聞いたことのない低い声で囁く。

リサの手首を強引に掴み、出て行く。

「あつ… ちょつ… 待つ…」

スコーピウスが焦つたように囁く。

クルッと振り向きスコーピウスを見据えるドーセット。

「アンタなんて大つ嫌いなんだから…! …行くよ」

そつ言い、早々と出て行く。

「ドードーセットー? リサの声が聞こえる。

残つたのは呆然とした男子たちとニヤニヤ笑いのフレッドリカ。

「ホラ、ドーセットも貴方のこと好きじゃないって！」

ねツ！と自分で可愛いと思ってるらしい笑いかたで笑いかける。

スコーピウスはといふと…フレッドリカのことをジッと睨みつけ、強引に手を振りほどく。

荷物を引っ掴み、押しのけて出て行く。

最後に残つたのは…

ポカソと口を開けたまま固まる男子たちとフレッドリカだけだった…

2人が…（前書き）

んと、アイリスとローズが壊れかけです。あと、ドーセットのお話はあちよい視線違つるのでスコーピウスが悪者的になつてます。その辺はご了承を。

（1人称）

テレサ：わたし

ドーセット：私

ローズ：わたし

アイリス：あたし

フレッドリカ：私

アルバス：僕

スコーピウス：僕

クライド：僕

ロウアン：ぼく

ジエームズ：僕

フレッド：俺

ローテリオ：俺・俺様

キャサリン：わたし

です。

なんか「ゴチャゴチャしてきたので書きました

です。

2人が

ドーセットの話が終わる。

「……なんか五分五分つぽい感じね」

「アイツがねえ～」

「なんかしつくり来ないなあ

スコーピウスってそんな性格だったかな～

ドーセットの話だと、スコーピウスが他の女の子とイチャイチャしてたつて感じだつたけど…

でもなあ、あのスコーピウスが……ないない。

「勘違いかもよ？」

「……でも…」

「だつてさーあのスコーピウスがわあ…ねえ？」

「うんうん」

「……そつかな」

「大丈夫だつて……スコーピウスも落ち込んでたもの」

「……ホント?」

「本当にだぜ……あの白い顔が青白くなつてた」

「ホラ、部屋で落ち着けば気分も楽になるんじやない?」

「……ありがと」

「ううん、二「シ」と笑うドーセット。

良かつたあ

皆で歩き出す。

そして、もう少しで寮に着く……といつといつ

「あーら、私の美貌には勝てないと思つて泣いてきたのかしつらん?」

…………何、この人。なんか気持ち悪い

…………セーラットの肩がビクッと揺れる。

「……邪魔です。退いて頂けますか

アイリスが少し（ー?）キツめに囁く。

「ふうん、アナタも私には勝てないと…」

「貴方、何言つてゐの?」

「それじゃ、負けを認めてくれなーい?」

「何の勝負のですか」

「え、分かんないのぉ?」

「だつて勝負してませんから」

「……ソロのアナタ。」

口では勝てないと思つたのか、通りすがりの男の子を呼ぶ。

「何?」

「これをお飲みになつて?」

どこから持つてきたのか…紅茶を差し出す。

「は、はあ…」

「クツと飲む男子学生。

飲み終わった途端、目が虚ろになる。

もしかして…真実薬?

… そんなものよく持つてたわね…

「ねえ、私とこいつの女どっちが可憐い?」

… うわあ… 根っから悪いわね

「僕は… こっちの人が…」

そつぱい、アイリスを指す。

「あー、あらがと」

「・・・・・・・・・・・・

呆然としているフレッシュドリカ。

「おーい…」

アイリスが目の前で手を振る。

しかし、反応は皆無。

「ま、こいや… よくわかんないけど、行」

「… う、うそ」

あっけらかんとまつアイリスに驚きながら歩み出す。

「お前、スゴいなあ」

アルバスが感心したように呟つ。

「モー、フ?」

10m歩いた位で、我に返つたフレッヂドリカが…負け惜しみ?なのかな…を叫んできた。

「ま、まああんな人に私の美貌が分かるわけないわよねー!ア、アナタたちなんて私からみたらアリんこよ!」

オーッホッホッホ!と高笑いするフレッヂドリカ。

その瞬間、アイリスとローズからプチッという音がした。

2人がクルッと振り返り、歩いていく。

それもニッコリの笑顔で。

なんていうのかな…悪魔の笑顔って感じ?

とにかく……ご愁傷様です…

「ね、……今何て言った?」

「…何にも」

危険を感じたのか、しきばつくれるフレッヂドリカ。

「あたしにはハツキリ聞こえたんだけどなー」

「私も聞こえたわよ」

「えーと、何だつたつけ？」

「んとねー、確か…アリン」…だつたかな？」

「えー…ソレはヒドい…！」

「アリン」…どうからそんな変な発想が生まれるかね~」

「ローズがこんなヤツより下のわけ無いのにね

「それをいうならアイリスもよ

「そりかなかありがと…まああたしもね、偉大になれる自信あるな
あ

「私も！」

「あたしたちの…」

「田の前にいる…」

「ハツフルパフの…」

「「最低女よりわねー」」

…2人の独壇場だ。

皆、ポカーンとしている。

「スゲ」「…」

アルバストとクライドがハモる。

「あ、ハモつたね～」

「すごいわあ私たち！」

「まあそれだけこの最低女の印象が悪すぎつていう事ね」
フレッシュドリカ

「あ、同感」

「こんな女にスコーピウスが惚れるわけ無いわね」

「100%無いわね。やつぱり、ドーセットの勘違いだわ」

「うんうん！絶対この悪女フレッシュドリカが一方的に攻めただけね」

「あ～絶対そうだわ」

「あの自信過剰！…有り得ないわあ」

「真実薬飲ませといて、自分じゃなかつたからつて開き直るとはねえ…おかしいよね、ハツキリ言つて」

「おかしいに決まってるじゃん！」「オーッホツホツホ！」「だつて…

古～ッ…」

「こつ頃の笑い方よ…」

「え、1800年頃じゃない?」

「うわっ 時代遅れ…」

「それにあの笑い方つて…」

「悪女とか犯罪者とかが笑うやつの方よね」

「わうわう…」

「あ～無理無理…あんなのよく出来るわね」

「ホントだよ…恥ずかしくないのかねえ」

「自信満々すぎてそーゆーのが分かんないのよ…」

「あ、それあるかも…」

「でしょでしょ～…」

「…あ！分かつた！」

「？」

「あの時、何でス「一ピウスが赤くなつてたかが！」

「えー分かったの？」

「推測だけど……」

アイリスがニヤニヤしながら話し始めた時…

「あ」

向こうからスコーピウスが来た。

「何してるんだ？」

不思議そうに聞いてくるスコーピウス。

「…アレよ、アレ」

「……」

「あの時、ジーセーの女は”ドーセットなんかより私の方が断然いいわよね！…やつぱりそうよねーなんたつて私に勝てる人間なんて居ないものー”的な意味わかんないと言つたんだよ」

「うわー！キモッ」

「それで”私のこの綺麗すぎる金髪とドーセットのあの汚い黒髪、私の方が絶対いいわよねー！ねッスコーピウスウ？”とかなんとか

「言つたんぢやない？」

「何で髪なの？」

「だつてこの女の唯一の取り柄つてこの髪だけじやない？」

「あ、そーいややうだね！」

「でしょ？…やつはわれたから、スコーペウスは”ドーセットの髪は綺麗だと思つた”って言つたんだと思つんだ。で、それを言つたあと何か急に恥ずかしくなつて真つ赤になつちやつたんだよー。」

「筋、通つてゐる。」

「やつたら、『イツが強引に腕とつて抱きしめやつたんぢやない？やつを見やられた…』

「へえ～！アイリスト…」

「でしょ？スコーペウス？」

「氣、氣づいたんだ…

スコーペウスを見ると赤くなつてゐる。

「あ、図星？」

「キヤー、頬が真つ赤つ赤？」

「… そう、なの？」

ジー セットが下を向きながら囁く。

カアッと真っ赤になつたスコーピウス。

「…………ま、まあ……うん」

そつぱい、そつぽを向く。

わたしたち（わたし、アルバス、クライド、ロウアン）は顔を見合
わせ、ニヤッと笑う。

だつて、笑つちやうじやない！

あのスコーピウスが真っ赤とか…

「ま、ジー セットの女は”私に赤くなつたんだわー ウフフ” とでも思
つてゐるんでしようけど」

「クッ……お、覚えてなさいッ！…」

なんかよく分かんない捨て台詞を吐きながらドスドスと去つていく。

ふしゅる

アイリスとローズの「氣」が抜けたみたい。

「あ～、言い過ぎたかなあ」

「でも、良いんぢゃない？いつも甘やかされてたんでしょ、あの様子だと」

「意外と夢中になっちゃったね」

「アハハハハ」

そんな2人にアルバスとクライドが駆け寄る。

「アイリス！ローズ！お前たち、スッゴイなあ」

「同感！アイツのあのどんどん青くなつてく様子！面白かった…」

…面白」と言つていいの？

「へへへ…」

「ホラ、あつちも仲直りしたみたいだし！ハッピーエンドで終わりつてことでー！」

2人が…（後書き）

うひや～楽しかった
こんちは、ジニーです。あ、名前変えました！
てことで（？）雑談コーナー！

♪雑談コーナー O . . .

メンバー：ジニー（つまり、ウチ）・テレサ
（来週からはゲストをお呼びするかもです）

ジ「ちわーっす！」

テ「こんちは、見て頂きありがとうございます！」

ジ「しっかりテレちゃんの友達いい子居すぞじやない？」

テ「…テレちゃん？」

ジ「いいでしょーその呼び方で、ハイ決まりー！」

テ「……」

ジ「ホラ、黙らないのーー！」

テ「…確かに、みんない子ばっかりだな～」

ジ「いーなあ…ウチの友達、心配性な子とかハリー・ポッターのこ
とになるとキャラが変わる子とかいつの間にか何故か本読んでる子
とか…」

テ「へ、へえ～」

ジ「みんな大ーい好きだけビ?」

テ「は、はあ

ジ「いえ～い」

テ「テンション高～ね…」

ジ「ダメ?」

テ「い、いや…ダメってわけじゃ…」

ジ「なら氣にしなあ～い！」

テ「…はい」

ジ「次どんなのなの?」

テ「えと…まあ、田常つて感じのお話かなあ?」

ジ「確かにこのお話は”非”田常だからねえ」

テ「うん。」この2人、また喧嘩するんだよねー。まあ、2・3年生の頃だけど

ジ「あらまあ…」

「あ、でも、何の話…」

「やーねー、やーねー」

「やーねー、やーねー」

お祭余（おまつりや）

余語文ばっかり～

授業が終わり、みんなで雑談中。

「今日の授業、楽しかったねー！」

「えー…せつかあ？」

「それは、ローズの得意科目があつたからじゃないの～！」

「アハハ」

「でも、アルバスってやっぱり箒で飛ぶの上手いなあ」

「絶対2年生になつたらクイティッチのチームは入れるよなー」

「応援するよーー！」

「そんなに上手いの？僕…」

「…・・・・はい？」

「えー…実感まるでなし…？」

「だつてさあ…」

「フレッシュとジーニームズが上手いのは当たり前なんだかー…だつて、

ビーターなんでしょう?「

「そんなもんか？」

「そんなもんよ」

「でも、スコーピウスの方が上手いと……」

「同じくらいなんじゃないか？」

- 10 -

そぞよ！アリ止まざむもの！」

そんなことで、ビースカブースカ言い合いをしているとジョームズたちが声をかけてきた。

「おい、アルたち！ 今田はハグリットのお茶会だぜ？」

「早く来いよ！糞爆弾投げるやー！」

・・・糞爆弾て・・・

おしゃれ！ギャルソン取るな！泥棒だぞ！！！」

1年生に向かって糞爆弾投げよ」とすねのかいになしの

「・・・あーあ、つれねーなあ」

げんなりとするフレッシュ。

「はいはい。 . . . ホラ、行きましょ？」

しかし、全く動じないキャサリン。

やつぱり、かっこいい！

「はーーー！」

「 . . . キャサリンの言ひ」とは聞くんだな . . .

「だつて！ キャサリンはオトナだもんな！」

「フレッシュのこと抑えられるのってキャサリンだけだし」

「そうそうー！」

「ありがとね」

キャサリンがはにかみながら言ひ。

「大丈夫！ . . . 事実だから」

「事実じゃねえ！ . . . 大体この俺が誰かに抑えられるなんてなあ
！ 100%な . . . 」

「1年生に向かつて喧嘩腰にしないのー！」

フレッドの言葉を途中で遮り、あつらひかんと叫ぶ。

「…………さー」

「やつぱつ、抑えられてんじやんー。」

「…くそッ」

「「「アハハハハハハハハハ」」

たわない話をしながら、ハグリッドの家まで歩く。

20分程歩くと、大きな家が見えてくる。

「あー、毎回毎回疲れるなあ」

「同感…」

「ドンドンドン…」

分厚くて大きいドアを思いつきり叩く。

ガチャといつ音と共に、ハグリッドが顔を出す。

「おー、お前らかー入れや、お茶入れとるぞ」

「おりがと、ハグリッドー。」

ぞろぞろと入る。

大きな大きなテーブルに、少しズレた感じでテーブルクロスが掛け
てある。

そこに無造作に置かれた、お茶とお菓子。

ハグリッシュらしいなあ

みんなが思い思いの席に座る。

わたしの席は窓側。

隣は、ジョームズヒーデーセシト。

「「いつただつきまあ～～す！～～！」」

いつもみたいに食べ始める。

このお茶会、1か月に一回やる「こと」になってるんだ。

わたしの楽しみの一つだよ。

「んつー～。コレ、皿シ～～！」

「え～～～ホントだ～おこ～～～！」

「コレも美味しこよ～」

「つむシ～。か～～～！」

「」のお茶も手作りなんだしょ～おこし～～

「ね～ホッとするつてこつか…」

「体の中から温まる…つて感じ～

「わいわい…そんな感じ…」

「ハグリッシュツヒス」なあ～

「ホントホント…」

「尊敬しなやうよ～」

「あの禁じられた森にもよく入つてゐんでしょう？」

「それなら、俺たちも入つてゐさせ～！」

「あ～…やつぱり行つてるんだ～絶対ダメなんだから～」

「ザつ…前が歸るの忘れてた…」

「向あれ～サイアク…」

「フレッドたが、あそこに入つてゐるの…」

「あー…」

「へつへ～す」」だら～

「その根性、分けて欲しいなあ……」

「そりゃあ、無理な要求だぜー。」

「ハハハハハハ……」

なんだかんだで過ぎていく、麗らかな一時……

お茶会（後書き）

「んにちは～ジーです
更新ラッシュ終わりましたw
てことで、雑談コーナー！

～雑談コーナー～

ジ「ちわーっす！」

テ「んにちは～」

ジ「いいねーハグリットー！」

テ「結婚もしたから、前よりも料理上手くなつたんだつて～」

ジ「うひょー食べてみたあ～い

テ「アハハ……で、今田のゲストは誰？」

ジ「わて、誰でしょ～？」

？「やつせ～！」

テ「ド、ドーセットー！？」

ジ「で」と、ドーセットです

「いえい、ココつて何すんのー？」

ジ「名前の通り雑談だぜい！」

「ホントー? 楽しそー。」

シ て し ょ で し ょ う

シ・ト・レベリ!」(ハイタツチワ)

テ・・・なんた鳥 會・・て

卷之三

卷之三

卷之三

わかれはいの!わかれはい!

シ - れ !

「ね～！」

テ（もう知らない）

ジ一 次は何あるのー?』

「んとねー、クイティーデイツチの観戦かなあ…グリフィンドール対スリザリンの！」

ジ「へえ～！樂しみやなあ」

「楽しかったよ　スゴイよね～アレ」

ジ「でわ…」

ジ・ド「じゃーね～～～～～～～～」

テ（わたし、忘れられたよね…）

クィティッシュ G対S ? (前書き)

クィティッシュと書きましたが、描写全くありません！
短いです、しかも。

クイティッシュ G 対 S ?

今日は、朝から騒がしい。

その理由は…クイティッシュ！

グリフィンドール対スリザリンだ。

グリフィンドールのチームは、キーパーが5年生のマイク・ウッド、ビーターがフレッドとジョーモズ、チェイサーが4年生のジョージ・メリ亞と2年生のケイ・ムースと6年生のアリーナ・コーリ、そしてシーカーが7年生のエイミー・ナイト。

このチーム、すつじい強いらしいんだ。

スリザリンが倒そうと躍起になつてゐる。

あー、楽しみ！初めての対戦だから、1回も見たことなかつたんだよね。

うわあ…ムズムズしてくる……ッ！

1年生は皆、そんな感じみたい。

みんなそわそわしてゐる。ま、わたしもその1人なんだけどね

「うへーつ試合、楽しみだなー！」

アルバスが興奮したようになつた。

「早く始まんないかなあ！」

「アルバ～！僕の手袋知らねーかあ？」

ジエームズがユニフォームを着ながら聞いてくる。

「それなら、アソコにあるんじやないか？」

「さんざるー！」

だんだんと慌ただしくなつてくる。

「よし！準備完了！」

「おうー！今日もパアツと勝つぞ！」

力むジエームズとフレッド。

「2人とも頑張れ！」

「絶対、勝つてよね～！」

「おうー！任せとけなー！」

意気揚々とグラウンドへ向かつ。

「んじや、僕たちもそろそろ行く？」

「りょーかいつ！」

クィティッシュ G 対 S ? (前書き)

うん、迫力無いよ。

表現の仕方も分からぬいな、はい。

クイティッシュ G 対 S ?

場所が変わり、クイティッシュのグラウンド。

グリフィンドール派とスリザリン派に分かれて、選手が出てくるのを待つ。

それにも、すごい…

マグル育ちのわたしにとって、見たことのないグラウンド。

背の高い、丸い輪っかの付いたポール。

それぞれの色の横断幕。

生徒だけでなく先生まで顔を上気させて盛り上がる。

その時、先生たちの前に1人の生徒が出てきた。

「では、選手が入場いたしますーー！」

その途端、ドアがバンと開き両方の選手が出てくる。

そしてグルッと旋回したりして、指定の自分の位置に着く。

・・・・・・・・アレ？

スリザリンの選手の中に…クレメンズが居るみつなかかる。

「…氣のせい…だよねえ?…だつて、アイツ一年だし。

「…ね、ねえクレメンズ…居るよつた氣があるんだけだ。」

ローズが恐る恐る聞いてきた。

「…ホントだ…」

「権力使つたんだぜ、多分」

「うわ、最低…」

すると、わたしたちの視線に気がついたクレメンズがこっちを向く。

そして、ドーセットを見つけた彼は…

……ワインク。

スリザリンの女子生徒はキャーーと叫んでくる。

しかし、当のドーセットは引きつった笑いを浮かべている。

再度、クレメンズがワインクをする。

するとドーセットは隣にいるスコーピウスの袖を掴み、「……吐き
氣がする…」と呟いた。

「…」

その時、大きな箱を抱えたフーチ先生が入ってきた。

「みなさん、準備はいいですか？…正々堂々と戦いましょう！…！」

チ
　　を放す。

そう叫ぶと、箱を開け金色の小さくて綺麗なボール
スニッ

次に今すぐ飛び出でいきそつなボール
の鎖を解き放つ。
ブランジャー

そして最後に普通の唯のボール
を放り
クアツフル
投げる。

その瞬間、下の方に待機していたチヨイサーたちが動き出す。

「さあ、始まりました！」さて、最初にクアッフルを取つたのは？
「おお！ グリフィンドールのジョージ・メリア選手です！」

いえい！

グリフィンドールの席から声が飛ぶ。

旗をブンブン振つたり、マフラーをグルグル回したりする。

そしてジョージーは、向かってくるスリザリンの選手を振り切り、
ゴールへ向かつた。

そのままゴールへ投げる。

キー・パーの反応が遅れる。

かねて、田の母にあがくべと

「開始早々、グリフィンドールに先制点……！」

「…………わ…………！」

ひとり大きな歓声が沸きあがる。

そして入れ返され入れ替えし、セーブしたりミスしたり…

会場がどんどん白熱する。

現在は80°50'。グリフィンデールの30%リード

えー!? なんか、ヒーリー同士の戦いが始まつた様子です！」

! ? ! ?

見てみると、ジョーマズとフレッド、スリザリンのビーター2人が
ブラッジャーを打ち合っている。

フレッシュドが相手に向かって打つ。

そのブラッジャーを相手側の1人が凄い勢いで打ち返す。

フレッドの反応が遅れた。

危ないツツ！

キャサリンが声にならない悲鳴を上げる。

しかし、反射神経がいいのかクルツと1回転しその場を凌ぐ。

グリフィンドール全体から安堵のため息が出る。

「ジエームズ頼むぞ！」

「おう……！」

ジエームズがニヤツと笑った。

そして近づいてきたブラッジャーを、フレッドに向かつて打つた奴とは違う人に向かつて打つた。

不意を突かれたスリザリンのビーターはそのブラッジャーをまともに食らつた。

そのまま地面に落ちる。

「よつしゃー仇送り成功！」

あ、仇送り……

「おお！？次はまたもやグリフィンドールのシーカーがスニッチを見つけた様です！」

キヤツー・トジーハー・！・！

あと50cmの所まで迫っている。

それを聞きつけたクレメンズがそこへ一目散に向かう。

あと
3
0
c
m
1
5
c
m
1
0
c
m

急いで、
今更ながら懲りて止めた
間に命にやがてない

卷之二

壁か固唾を飲んで見う。

M 0 (W) 0 (5) 1 0 M

手を思いつくり振り、スニッヂを掴む。

3秒の沈黙の後、爆弾が爆発したくらいの音量の歎声が響く。

アイリスがドーセットと抱き合ひ、ピヨンピヨン飛んでる。

キャサリンは放心したように座り込む。けど、笑みが広がってる。

男子たちは思いつきりジャンプ。

わたしとローズはハイタッチの連続。

「やつたね！…」

「賭け成功！」

アルバスたちは誰かと賭けてたみたい…

「こ」の後、いつつもパーティー やるんだぜ！ ジェームズたちが厨房からくすねてきたりして食いもん持つてくるんだ

「こ」るで、談話室に集合………

「りょーか～い！…！」

クイティッシュ G 対 S ? (後書き)

こんにちは、ジニーです
行事が重なつて、毎日更新は出来ないと思いますが、よろしくです

お知らせ

お知らせです

プロフィールんとこに、友達と合作とかなんとかって書きましたが、この作品はわたしだけで書いてて、他の作品で同じキャラが出てきます。

その作品も是非読んでくださいー！

ゆき・作の『闇再び』

<http://ncode.syosetu.com/n1659>

X /

テレ・作の『ジーモズポッターと隠れた罠』

<http://ncode.syosetu.com/n6844>

W /

ピンポン玉・作の『スコーピウスの日記』

<http://ncode.syosetu.com/n5291>

W /

です

ジーモズポッターと隠れた罠はジーモズが1年生の時からのお話です。

内容もおんなじような違つような…

ま、似てますね。

スミマセン、畠が書き始めたのでちょっととした画です

お粗末様でした・・・vv

次は...「スコーピウス」(前書き)

この時は、 目線で書いていきます。
何にもなかつたら、テレサ目線です

あと、登場人物紹介増えました!

次は……「スコーピウス」

12月に入つてすぐ。

大分寒くなつたし、ホグワーツもクリスマス色に染められてこる。

「ふへへつ疲れた……」

授業が終わり、ドーセットが談話室のソファーパーロンヒと寝じらが。

「ね、この後何するー？」

「ロロロロロロしながらドーセットが言つ。

「ん~、グリフィンダールんとこでも行く？」

「いいねーソレー！」

今まで心底疲れた顔をしてたのに、パアツと花の輝きはじめる。

……「」の変わりりよつ……

「ん、僕も賛成！」

楽しそうだしね

「早速行こうよー。」

リサが「ココ」ながり言へ。

「つょーかいッー。よつと待つてて、お菓子持つてへるな

ドーセットがパタパタと上に上がる。

そのあとをボーッと見つめていたり、リサが「ヤーヤ」笑つているのが目に入った。

「何、笑つてんだよ?」

「べつひこークフフ…」

「ちよ、ホント何笑つてんのさ

「だあかあらあー何でも無いってえーアハハ…

「いや、何でもあるだろ」

「あははーーーーー

「…………

「お待たせ~行こつ~」

今までのやつ取つを全く聞いていなードーセットが「ココ」出でた。

「…………

「…どうしたの？？」

「…何でも無い」

「アリ？…それより、早く行こ」

「ん、分かった」

細かい」とは気にしないんだな…デーベルトって。

「ホラホラ、動いて～」

デーベルトに引きずられながら寮を出る。

この姿を見て、またリサがクスクス笑いながら田を逸らされた。

キッと睨むと、クスクス笑いながら田を逸らされた。

何なんだ、^{リサ}アイツは…何がおかしいんだ？

* *

しづくしづく…

「ハーヴィ？」

フレッドリカ
…アイツが出てきた。

最近前によく現れる。

ストーカーしてんじゃないかってくらー。

「また、ドーセットと居るの?私たちの所の方がいいわよ~歓迎したげるわん」

……?

「……いいデス……」

「えー、ホントに? やっぱり私のほうが魅力的なのねッ……あやつ」

「……」

「やつやつたらそつなるんだい?」

「ねえ、どう聞いたらその返事に聞こえるの?耳がもう一歳にして老化しちゃった? それとも、そりこつ風にしか考えられない頭なの?」

リサ、こつもおつとりしてんだけどなあ

マイツのひとになると性格が怖くなる。

「スコーピウスうう~私たちの所に来るんだよねえ?ねッ?」

上田使いで目をウルウルさせながら聞いてくる。

……ドーセットがやつたら可愛いんだらうな
は何を考えてるんだ！？

え、んと、まあ、とにかく……

「こ、いや……グ、グリフィンホールに行くからサ……ハ、ハ、ハ……
と、とにかくドーセットとリサ、早く行け……ホラ……」

早く、ここから逃げよ！

ドーセットがまあまあ無口にならぬし、リサが壊れかけそりだし……

なんか後ろから「ちよつと、スコーピウスう～？待つてえ～」「
てこう声が聞こえた気がしたけど……気にしない……

+ * + * + * + * + *

「んもうー何よ、あの最低女！ストーカーなの？12歳なの？ー？」

リサが憤慨してる。

「ま、まあ……落ち着いて、ね？」

ドーセットが宥める。

「...テナントのセーフティ...」
「...」

次は…～スコーペウス～（後書き）

んど、1話にまとめるつもりだったんですけど。
長くなつたんで、2話にわけちやいます

～雑談「コーナー～

ジ「いやつほりー」

テ「いんこひはー」

ジ「2話ぶりだねー元氣してた？」

テ「勿論ージーーは？」

ジ「ショックのどん底に落ちてた。」

テ「…ええー？あのジーーが…？」

ジ「落ちてちや悪いか！」

テ「え、あ、いや…と、とにかく今日のゲストは？」

ジ「…ホントは前の回で呼ぼうと思つてたんだけど、ショックでヤ
バかつたんで今回呼んだんだ。…仇送りのジーモーズ君！」

ジ「ちやーつすー呼んでくれてありがとー」「やこまます」

テ「仇送りのW」

「ね、さつきから聞いてたけど。ショックって何がショックだつたんか？」

ジ「...色々「

「それは知ってる。」

ジ「：ウチは青山剛昌先生の作品と高橋留美子先生の作品が好きなのは知ってるでしょ？」

テ・ジエ「うん、知つてゐる」

ジ「それでね、るーみつく（高橋留美子先生）の作品のなかでらんま1／2つていうのがあるんだけどね。それが……」

テ・ジエ「それが…？」

ジ「...実写化したやつのよお~~~...」

テ・ジエ

テ「ショックじゃないじゃん」

「喜しいんじゃね？」

ジ「…永遠の一次元が良かつたあ~~~~~！～！～！～！～！～！～！～！～！～！～！～！～！～！

！――！」

テ「……あ、そ」

ジユ「やめ」となんだな…」

ジ「シクシクシクシクシク」 ry

テ「だいじょーぶ？（棒読み）」

ジユ「大丈夫じゃなやうだな」けど

テ「そだね、…じゃ」

ジユ「代わりに終わらすことへか」

テ「了解ー」

ジユ「…ヒ」と

テ・ジユ「「やよいならあ～～～～～」

ジ「シクシクシクシクシクシクシク」 ry

「……………セシトはいいの!?

え？

いつもより数百倍強い調子で言われ、少しだじりぐでーセット。

？」
だから、あの最低女がまとわりついてるの、見てて大丈夫なの！

「……………」

た。たゞジジと叫ぶが、」

七
卷之三

「『スニーカー』にまどねりーかないで!!』とか!!」

ても わ……私が決めた」といふらしいもの……

は、さういふ事は、さういふ事は、さういふ事は、さういふ事は、

・・リ
リサ！？

「…………え？」

「だから・・・・・! なんで、なんでさー! そんなに根性が無いの! ? ・・たまには堂々と書いてみたらどう? 」

ちよ、言いすぎだ・・・

「リ・・・・サ?」

「ホラー！」まで言われても全然言い返さないじゃない！・・・クライドには別かもしけないけど、友達にだつてそれくらい言わなきやー！」

— 1 —

「ねえ！？」

「・・・わ、私には・・・」

「何？」

「…………私にだつて！私なりに…………色々あるんだからー！コサには…………
・・・・・関係ないぢやない！ー！」

・・・・・ヤシトも此がまだよ・・・

少し声が震えてるけど冷静に静かに言い放つリサ。

「……スロー・ピクス、帰るよ」

ドーセットに手首を掴まれて引きずりられる。

わつかは笑つてたのにつかも無表情だ。

そのまま、コサはグリフィン・ホールのところまで歩き、教えてもらつた合言葉をいい、バン！と大きな音を立てて入つていく。

「……ドーセット？」

「…………」

無言のままスタッフと並んでドーセット。

角を曲がつてすぐ、早足だつたドーセットの足が止まる。

そして、そのまま蹲つた。

「…………だい、じょりぶ？」

顔を覗き込むと、ドーセットの皿に涙が溜まつていた。

「…………だい、じょりぶ…………だよ…………」

切れ切れに呟くドーセット。

そのまま一分ほど経過すると、耐えられなくなってきたのか嗚咽が漏ってきた。

「うう……………」
「……………」

我慢、しなくてもいいのにな……

「ジー・セ・ジ・ト？……………耐えられないんなら泣いてもいいんだよ？……………我慢しないほうがいいと思つけど」

「……………」

「思いついたら、落ち着くんじゃないかな？」

ふつとジー・セ・ジ・トが顔を上げ、僕の顔をジッと見つめる。

？？

「……………スコーペウスツ……………」

「……………？」

ジー・セ・ジ・トが飛びついてきた。

そのまま大声で泣き始める。

……………

そのまま手を背中に回し、たまる。

泣き止むまで・・・

* + * + * + * + * + * + * + * + * +

10分ほどすると大分泣き止んできた。

「・・・・ねえ、私・・・・これから、どうしよう?」

囁くような小声で聞いてくる。

「ジー・セ・ジ・トは、仲直りしたいんだろ?」

「うん・・・・でも、私リサが言つてゐること・・・・分かんない・・・・

「

「そつか・・・お前、キリスト教だけ?みんな、平等みたいな考え方だもんな」

「・・・だからリサの言つてゐることがわかるよつくなるまで・・・

「距離を、置く?」

「・・・うん、やつする・・・」

ちわっす、ジニーです

「雑談」「ナーナー

ジ「いえい、ジニー やで」

テ「テレサです、こんにちは～」

ジ「あ～疲れたわあ」

テ「・・・毎回、挨拶の言葉変わるよねえ」

ジ「そんなん Bieber でもいいやんか！・・・今日のゲストはシリアル
っぽいスコーピウス君！」

ス「え？あ、こんにちは・・・

テ「・・・シリアル？」

ジ「シリアルス知らんのやー？」シリアルスつちゅうのはあ”きわめてま
じめなさま、本格的なさま、事態などの深刻なさま等の意味”って
意味やで！（ウイキペディアから抜粋）

テ「へ、へえ～」

ス「僕、そんなに深刻そつか？」

テ「た、さあ・・・・?

あとさ、何故に関西弁なの?」

ジ「いいやろ!好きなんやもん!」

テ「そ、そうですか・・・・」

ス「関西弁って何?」

ジ「それはやなあ・・・・」近畿方言とは、近畿地方のうち、兵庫県但馬と京都府丹後西部を除き、福井県嶺南を加えた範囲で用いられる日本語の方言の総称である。西日本方言に属する。上代から近世中期までの中央語である畿内語・近世上方語の系統を汲む方言で、現在も東京方言や首都圏方言に次ぐ認知度と影響力を持つ。

関西弁と呼ばれることがあるが、「関西弁」は大阪弁を中心に見据えた呼称であり、三重県の方言が近畿方言であるにも拘わらず、「関西弁」のイメージから外されやすいなど、近畿方言の実態に沿っているとは言い難い。漠然と西日本全域の方言を包括して「関西弁」と呼ぶことさえある。"やつて、何書いとんのかサッパリ分からんなあ"

ス「・・・・は?」

テ「長すぎだよ!」

ジ「あ、これもウイキペディアから抜粋や」

テ「・・・・・・・・」

ス「ウイ、ウイキペディア・・・・」

ジ「駄目なん！？」

テ「い、いや……」

ス「全然ダイジョブです……」

ジ「分かればいいん！分かりや！」

テ「…………」

ス「ハ、ハ、ハ……ドーセットより、面白い人だね（おかしい人・
・・）」

ジ「何か言った？」

ス「べ、別に……アハハハハハ

ジ「ま、いや」

ス「大雑把などいわむドーセットに似てるな……」

ジ「次、何？」

テ「えとね……ジエームズがちょっとした提案してくれるんだよね？」

ス「うん。クリスマス休暇の前のちょっとした思い出だとか何とか
つて」

ジ「・・・いいのあ楽しかつやなあ」

テ「では・・・」

ジ「まあ～いー」

テ「じゃねーー」

ス「次回も見てくださいーー」

→TFからの提案（前書き）

オリキヤラまたまた来ちゃったW
レイブンクローのファーンです！
次の次はものすごい勢いでたっくさん登場すると思います。

「お~い、ちょっと提案~」

あともう少しだ、クリスマス休暇と二つと、ジムー・ムーズとフレッシュから声がかかる。

「なんだよ~」

アルバスが不機嫌そうに返事をする。

「おいおい、不機嫌そうにするなんよ。楽しいことなんだからね」

「…何?」

「休暇の前に、パーティーするんだ。勿論来るだろ?」

皆の目がパアッと輝く。

「このパーティーは俺たちの主催だから、招待した奴だけ来れるようになつてんだぜ」

フレッドが言葉を引き継ぐ。

「そして、条件が二つ…」

「僕たちは厨房から食い物くすねてくるからさ…」

「アルバスと誰か1人がアレとアレ使って、ホグズミードまで行ってほしいんだ」

「それつくらい、軽いもんだろ?」

「アレ・・・?」

「アレって何?」

みんな疑問に思つたようで、アイリスが代表として聞く。

「ん? アル、言つてないのか?」

「あんな、僕たち父さんから透明マントと忍びの地図つていうのを、貰つたんだ。」

「それで、ホグズミードまでの近道も書いてあつてさ」

「へえ~! あたし、行きたい!」

アイリスの目が、悪戯そうに光る。

「アイリスつてそういうの好きだつたっけ?」

ロウアンが聞く。

わたしもそう思つたんだよね

「え、知らなかつたあ? あたし、悪戯とか規則破りとかワクワクし

ちやう派だよ！」

ふうん、意外だなあ

「あ、わたくしで、よろしくなー。」

「んで、2つ目は、ウヰイターやつてほしいんだ。」

「——？」

ウエイターにて、水とか食べ物とか運んでくる人のこと？

その後で脇渡すかふさ そこをせよN|Jぐ！

……ちと待つ! とあるのよ。

「一ノ瀬が魚子たまごには置くべく

そこにはこの最も質問だ

ノ
テ
・
が
て
せ
る
と
こ
ある
・

「ケケケ……それが見つけたんだよ！招待した人しやなしと絶対入れないようになつてるし。」

「だから、場所は？」

「大広間を左に曲がって100m位歩いたとこ」

「… そんなところに部屋なんてあつた？」

「行きや分かるつひー。」

「……ほーい」

「んじゅ、よろしくべー。」

そう言ひ、手を振り振り去つていへ。

「それじゅ、テレサとローリーズがドーセットたち誘つてきてよー。他に
も誘つていいし。」

「うんー。クラウドとロウヴァンはリサたちね。フレッドリカ クレメンス
誘わないでよね」

「OKー。」

「分かつてゐつてー。」

今、ドーセットとリサが喧嘩中。

だから、最近はドーセットはスコーピウスと2人で。リサはファン
とヘーリーと3人で行動してゐみたい。

「ほひ、テレサ行くつー。」

「うそー。」

データセシナーもスコーピウスも「ホントー?」、「行くに決まつてんじやん!」といつ返事が即答で返ってきた。

リサたちもOKだつて。

他にも友達たくさん呼んだし、クラスメイト同級生も全員呼んだ。

ウエイターはどうなるか分からな^いけど、とにかく楽しませやー。

「TFからの提案（後書き）

はい ジニーです
クリスマスパーティー！妄想広がりまくり
場所は勿論アソコです！

「雑談」「ナー」

ジ「ふえ～いー・ジニーちゃんです」

テ「いんには、テレサです！」

ジ「いーなあクリスマスパーティー！」

テ「楽しいよ～」

ジ「子供だけっていうのがまたいいなあ～」

テ「出来ないの？」

ジ「出来るわけないじゃん！..」

テ「www」

ジ「では…今日のゲストは不機嫌アルちゃん」

ア「僕は不機嫌じゃないし、ちゃん付けやめて！」

ジ「ホラ、不機嫌ジャン」

ア「…………」

テ「ジニーったら…変な紹介の仕方やめなよー。」

ジ「えー、なんでえ」

テ「だつて”仇送りジユームズ君”に”シリアスつぽいスコーピウス君”に”不機嫌アルちゃん”でしょ？」

ジ「いいでそ、別にいー」

ア「でそ？」

テ「言い間違えー？」

ジ「ワザとに決まつてんじゃんーそーゆーのがあるのー!うちの姉妹つてやつでー!」

テ「ふうーん」

ア「…ホント?」デセレクト並みにテンション高いね

テ「でしょー!」

ア「ついてけないよ」

テ「疲れるよ…わたし、これ毎回なんだよ?」

ア「うわ、サイアクじゃん!」

ジ「ちよつとお? 何、悪口言つとるん?」

テ・ア「べつひこい~」

ジ「うわあヒツドーイー!」

テ「はいはい」

ジ「で、次は何?」

ア「あ、機嫌悪くなつた」

テ「ええ~つと、次はねえ...クリスマスパーティー...
直前だよ~」

ジ「あ、何それ。」直前”なの?』

テ「アンタが書いてるんでしょ

ジ「悪かつたですねーだ!」

ア「ハ、ハ、ハ...」

ジ「んむつーいいやーじゃねーフンッ』

テ「.....」

ア「.....」

テ「…ホントにこなくなつたわかった」

ア「じゃ…」

テ・ア「わよーなう～（^○^）～～」

パーティー直前 ? (前書き)

えー、んと長くなつたので、こんなのに?付けちゃいましたw

アハハw w

でわ

パーティー直前 ？

そして、7時…

始まるのは8時半。

わたしたちの集合が8時だから、それまでに色々と準備する。

ジョームズは夕食の時にもう、厨房まで行ってたみたいで、透明マントをアルバスに渡していた。

「んじゃ、よろしく頼むぞ！ くれぐれもバレなこよう……」

「OK!」「了解っ！」

厚着をした、アルバスとアイリスが一見ただの古ぼけた羊皮紙（もちろん忍びの地図）とお金、それとおつきなバスケットを両手に持つて、透明マントを被った。

…「わっホントになんにも見えない！

こんなのあるんだ…

「ス、スゴ~い…」

「ほらほら、グズグズしないで行つて来いー！」

「「はーー」」

何も見えないとこのから声がする。

正直言って、恐いです。はい。

「んじゃ、行つてくる。」

アルバスの声が聞こえたかと思つと、ドアが独りでに（ハハ）見えるだけだけど）開いた。

「うひょー、こんなんだったんか…」

「それにしても、お前の父さんスゲーの持つてんないー羨ましいー。」

フレッドが物欲しそうに囁く。

「でも、忍びの地図はお前の父さんから貰つたものらしいぜー。何でも、フィルチに怒られてる時に糞爆弾、爆発させてその間に立を出しからくすねてきたものだとか…」

「ー？ そつなんかー俺の父さんもスゲーー。」

「あ、そうだー服…服…」

…！？

「ホイー！」

なんか、服を6着投げてきた。

…全体的に赤と白のアレみたいな服。どこからどう見てもあの服。クリスマスといえば！みたいなあの服。

え～っと…」れ、どんな反応すればいいのですか？

「ちよ、ま、コレ…」

クライドが抗議しようとすると…当然の如く無視された。

「朝、言った通り、ウェイターよろしくな！んじゃ、俺たちとキヤサリンは色々と準備しなきゃいけないし、先行ってるな～…じゃな！」

早口でパーッと言つてのけ、足早に立ち去つていぐ2人。

わたしたちに拒否権はない……

「…………」

「…………てか、哪儿で着ればここのかすりかわる…………」

「…………うん、わかんないね。ローブで隠すとか……せ」

「…………あーあ、ホントに着るのか……」こんなのが……「うう」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………あー、わーい。あーいのむしかなこいんだよ、わーい。…………」

「…………セーだね。一回着つけたらば、慣れるかもね…………」

「…………あの2人にも文句はあつたりませぬ」

「…………100%文句言つからね、あの2人なう」

「…………ショックが納まつてからだと思ひたゞ……」

「…………その間に納得させるとかは、絶対……」

「…………納得させても文句言つね、絶対……」

「…………聞き流せりぜ、頑張つてわる…………」

「…………りょーかい、同意しないよう」
「元

「…………分かつてゐる……努力するわ……」

「…………あ、耳塞ぐでもいいかも」

「…………それなら、いけるかもね」

「…………ボーッとしてるでも」

「…………ソレ、いいかもーー」

「…………出来るだけ頑張る」

「…………何話してゐの?」

「…………何だつけ……?」

「…………忘れたわあ

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…とにかく、アルバスたちが帰つてくるまで待つしかないね」

「…うん、それまでに覚悟決めとくか」

「…決められればいいけどね」

「…可能性は0%に近いよ」

「…まあ、しょうがない。それは…」

「そだね…」

少々（？）壊れながら、アルバスたちが帰つてくるのを待つたとさ

…！

パーティー直前？（後書き）

いやほほ～ジーーです
階段台詞、楽しかったあ
テレサとクライドへ
壊れちゃって「メンネ

～雑談「一ナ～」

ジ「うひょ～い」

テ「……」
「まちがえ」

ジ「あれ～暗いねえ」

テ「……わたしは壊れないもん！あんなにならないもん！～！」

ジ「え、ここでもう壊れてるじやん」

テ「……アンタが書いてるんだもん～」

ジ「はーいはーい 今日のゲストは、恋愛に興味がない + 今日テレちゃんと一緒に壊れてたクライド君だよん」

ク「……+ってなんだよ」

ジ「んと、そのままだよ～」

ク「……僕だって、こんなに壊れなこせー……姉ちやんは別だけど」

テ「それ言つちやダメー...ドーセット、見てるんだよ?」

ク「ゲッ...マジ?」

ジ「来てるよ~ん~てか、ほとんど一心聞いてるんだよん」

テ「今田は、F・Zみたいな話しがだね」

ジ「F・Z?...あ、アイツねえま、いいじゃないのん」

ク「僕、すっげえ苦手...」

テ「誰でも苦手じゃない?」

ク「ま、そーだらうけど」

ジ「はいは~い、F・Zについての講義(悪口)せりじめでして、次はなんですかー?」

テ「え、次はクリスマスパーティーの準備?でしょ?」

ク「あの服について、抗議していったんだっけ?」

テ「アルバスたちはめつちや怒つてたけど、止めたじゃない」

ク「あきらめて、手伝って行ったお話を

テ「多分、そうだと思つけど」

ジ「もう、ホントに適當だなーーーま、いーか
てことで、また今度ねー！」

テ「じゃねー！」

ク「もう、僕は壊れないからーーーちょっとねー！」

パーティー直前　？（前書き）

やつほう？ですw

？あるかも～　んで、今回長いへせこ、次は短いと思うよん

パーティー直前 ？

ボケーッと4人でソファーに座つて40分・・・・・・

「ただいまー！」

「お菓子いっぴに置つたよ～」

アルバスとアイリスが元気良くな帰つてきた。

「あり？・どーしたの？」

「ポカーンとしてるけど」

その瞬間、田配せを交わしアルバスとアイリスを捕まえた。

「「 + * <#\$_&) ” ! , &? ^ _ } * ^ < ^ ! ? ! ? 」」

あの後、皆で話し合つて色々と作戦を決めた。

絶対逃げると思つたから・・

「な、何！？」

「みんなどーしたのよ！？」

もがく2人を抑えて、上に連れて行く。

「ちょっと、ローズにテレサ！？」

「ハメン、色々あつてさ・・・・四、翻つてせひうね・・・」

一応、謝つておく。

「ちよ、あ、え！？」

目隠しをして、服を脱がせ、あの服を着せる。

そして、脱がせたローブを羽織らせる。

そして田舎しをせたまま、わたしたちもパパッと着替え、ローブを着る。

ホツと一息ついて、アイリスの目隠しを外す。

「ふひや～～ホントにナンなのー～～ど～したのー～～」

「カムカム……ホントに何があるんだよ……」

「何、着替えさせたの？よくわかんないけど……」

絶対に脱がせないからね！私たちだって着てるんだから！」

「何が？」

「ローブの中、見てみなよ……」

5秒の沈黙の後

רַבְנָן

11

アイリスが思いつきり叫んだ。

同時にアルバスも向こうで叫んだみたい。

「いやあっ！何、コレ！？なんてゆー服なの！？あたしはナンなの

「もう、やだあ～～～！あたし、どーすりやいいん？でかこには何
・？ビーチー 反応すればいいの？・・・・・・・・・・・・
・エーット、アタシハアイリス・ライト。11サイ。ホグワーツマ
ホウマジユツガツコウノイチネンセイ。ソシティマハジエームズ
ポッタートフレッド・ウイーズリー・ノバー・ティー・チョクゼン・デナゼ
カヘンナフクロキサセラ・レティル。・・・・・・・・・・・・・・

・・・アイリスも壊れたわ・・・

「ア、アイリス？」

「大丈夫？」

「コレガダイジヨウブニミエタラ、アナタモコワレテルトオモウヨ」

「そ、そだね……」

「もうすぐ始まるから、直りにやへ。」

「ガンバル
こさしせそ
つたーーー！」
あ、いつえおかげ
あ、直つたかも！直つた直

「あ、良かつたあ」

「あのままじや、出れなかつたね」

「へへへ…とにかく下い」つかーーー！」

「OKーーーもつ諦めたから。」

「うん、気にしないようにがんばるっか

「そだね…」

下に降つると、ちゅうび一緒にあつちも降つてきました。男子たち

みんなして、顔が青い。

「ね、もしかしてアルバス壊れちゃつたの？」

「さっきまで、な…僕たちも壊れてたから人の」と言えなこナビ

「ま、行こつかー！」

「 そだね…」

もう開き直つた4人に對し、後ろでボソボソ言つている2人。

「 ホラホラ、もう諦めて、思いつきりやつちやえばいいんだよ！」

「 ……少しだけブツブツ言わせて…」

「アハハ… w」

「 えーーと、どこだつたつけ？」

「 大広間から… 左に100mじゃなかつたか？」

「 そうだつた！ えーーと… いじっ」

そこには… 大きな鉄のドア
がドンとあつた。
といつよりは扉？

「 … テカツー？」

「 … いんのあつたつけ？」

「 … 知らなかつた…」

「 … すつーーい…」

ギイツと扉を開けると…

そこには大きな丸いテーブルが20個ほど並び、大きな壇上などが

ズラーツと並んでいた。

4人でポカーンと絶句する。（アルバスとアイリスは見てもいない）

「お、遅いぞ～！」

「やつと来たか…」

「あ、みんな！」

「あ～、みんな可愛い？」

フレッドとジョーモズ、キャサリンとビクトワールが迎えてくれた。

パーティー直前　？（後書き）

「こんちは～ジニーです
今日は体育祭でした～予約更新なので、まだやつてもいないですけど～」

「雑談コーナー」

ジ「イエースウェイキャーラン～～～ジニーです～（片仮名英語お

～）」

テ「こんには、テレサです～」

ジ「あ～、疲れた疲れた～」

テ「へえ、良かつたね～」

ジ「え、何それ！ひどつ」

テ「いいじゃんいいじゃん」

ジ「うえーーん！テレちゃんがイジワルになつたあ～」

テ「はいはい、わるー～ございました！」

ジ「…先週の続いてるの？」

テ「何が？」

ジ「ニヤ、ハーネスなん！」ハーネスの叫びが響く。

テ「アハハ…今日のゲスト、誰?」

ジ「今日はあ…ブツブツ言つてるアルバスくんだよ」

アーティストによる... ブックアートによる... など

テ「毎回見てると思うけど、この人おかしいから」

シ・おかしくなんかなしゃい！」

ア：おかしいでしょ

ジ「シクシク……2人とも1回壊れた人だあ……しかもつい最近ー！」

元良かつたねえ

シ よかなしわし！」

ア・変な喋りかた

シテ思つばな

元・アーニッシュ
悪い」

ジモトヤカヒコ

テ「はいはい！えつと、次はですねー…」

ジ「あ、先に始めるな！」

テ「（無視）前書きにあつた通り、？でーす？」

ジ「ちよ、無視すんな！」

ア「（無視）準備が長い分、パーティーも長い（つもり）だからな！」

テ・ア「じゃ、また明日～～～！～～！」

ジ（マジで無視されたあ……）

パーティー直前　？（前書き）

短いと思ったら、意外と長く出来たw
ま、1000字越えはしてないけど。

でわ

パーティー直前 ？

「ちょっと…」の服、なんなの…？」

後ろでボーッとしてた、アイリスがブサクサ言つた。

「え、だつてクリスマスだろ？」

あっけらかんといつジョームズに呆れて言葉が出ないアイリス。

「はあ……もう、いーや。」

そして放棄。

「もう、一生こんな服着ないからな！」

アルバスも言つ。

「へえへえ、分かつてますよーだ。それより、1人だけメンバー チエックやつて欲しいんだけど」

それより、ねえ？

ま、いつか。

「メンバー チエック？何すんの？」

クライドが不思議そうに聞く。

「ん、ただ来た人に名前と寮聞いて、チェックするだけ。料理運びは、力仕事だからなあ…女子の誰かがやつて欲しいんだけど…」

「あたしはどうでもいいよお?」

ふわあ〜と欠伸をしながらアイリスが言づ。

「私も何でもいいわ。テレサは?」

ローズがわたしに振つてきた。

「わたしは…どうでもいいけど、あんまり力無いよ?」

わたし、本当に力がありません…

それはもう、ビッククリするぐら〜!。

じゃ、あんまりじゃないのかな?

「それじゃあ、テレサがそれでいい?」

「いいんじゃない?」

ロウアンが同意する。

「わたしもOKだよ!」

「んじゃ決まりだな。…てことで、これよろしく〜。」

フレッドに2枚の紙を渡された。

そこにはズラーツと名前が並んでる。

うわっ…すごい！

知り合ひ多すもじやなし?

「こんなに来るの！？」

勿論
しゃなきや
こんなは大きいと「ほしね」「お」

「そりゃ、そうだね」

卷之二

「×を△で繰るなさぎなあ

こんなに来るんだから

「お。もうすぐ時間だぜ……テレサは入口のところに。他は奥のほうに下がってて」

ジエームズが指示を出す。

みんなが言われたところに行つたところで、フレッドが叫んだ。

「絶対にふざけんなじやねーよ?」

「分かってるわよ！フレッドのほうが心配だわ！」

ローズが叫び返す。

「『』の俺がふざけたぬとでも……」

「思ひに決まつてゐるじゃなー。」

「俺に対する認識つてそんなのなんか?」

「あつたつまえでしょー。?」

「ひつでえ~……」

「んもう、とにかく、絶対ふさけるよつな真似はしないでね?……ま、キヤサリンも居ることだし安心だなび。」

「…………お~」

なんだかんだで、8時が過ぎた……

パーティー直前？（後書き）

やつほ～ジニーです

今日は、雑談コーナーは無しです××
時間が無い+母上様がお怒りぎみなものでw

来週はいよいよパーティー！そして後書き雑談のゲストはフレッド
君。

あ、もう予告しちゃおうかなあ

1、『パーティー！？』

ゲスト：フレッド・ウェーバー

2、『パーティー！？』

ゲスト：ローズ・ウェーバー

3、『パーティー！？』

ゲスト：ロウアン・クリービー

4、『パーティー！？』

ゲスト：アイリス・ライト

5、『クリスマス休暇くポッター家&ウェーバー家』

ゲスト：リサ・ウッドバーン

6、『クリスマス休暇くライト家』

ゲスト：ビクトワール・ウェーバー

7、『ここはドコ？』

ゲスト：ドーセット・スリザリン

8、『新聞社設立！？』

ゲスト：アイリス・ライト

9、『やつと！』

- ゲスト：スコーピウス・マルフォイ
『クイディッチ R 対 S』
- ゲスト：ジエームズ・ポッター
『ぱーちい？』
- ゲスト：アルバス・ポッター
『ダンスパーティー』
- ゲスト：クライド・スリザリン
『クイディッチ R 対 H』
- ゲスト：フレッド・ウイーズリー
『イースター休暇』
- ゲスト：ローズ・ウイーズリー
『あれ？なんか…』
- ゲスト：ロウアン・クリービー
『クイディッチ G 対 H』
- ゲスト：キャサリン・ハーコート
『クイディッチ S 対 H』
- ゲスト：リサ・ウッドバーン
『呪い！？』
- ゲスト：ドーセット・スリザリン
『謎…天…』
- ゲスト：×
- 『罠…ドーセット…』
- ゲスト：スコーピウス
『クイディッチ G 対 R』
- ゲスト：ジエームズ・ポッター&フレッド・ウイーズリー
『優勝は…？』
- ゲスト：アルバス・ポッター
『夏休み！？』
- ゲスト：クライド・スリザリン

あら、すげーわあ

これはあくまでも”予定”なので、題名が変わつたり？が増えたり、ゲストが変わつたりとすると思いますが、よろです

ヘナツヘスリヤシナシヘ

あ、少し寒気が。（母の怒りw）

でわ

パーティー！ “メンバー”（前書き）

はい、短い？のかな？

でも、いつもよりは短いかなあ
でわ

パーティー！ “メンバー”

『な、こりで合つてるんか？』

『た、多分・・・』

外からそんな声が聞こえてきた。

あ、来た！

思わず武者震い

ギィーと扉が開いた。

「あ、合つてたぜ！」

「な、ジェームズとフレッドのパーティーってココだら？」

グリフィンドールの男子4人だ。

「はいーこりで合つてますよ？えつと、名前と寮をお願いします」

そうじつてニコニコと笑う。

営業スマイルつてやつです

「あ、ドングレイ・フリフイン、チャールズ・パイパー、ヤット・

えへっと・・・あつたあつた！

「ありがとうございますー。どうぞ中入ってください」

ଶ୍ରୀ ମହାଦେବ

なんか、少し口ごもつてるけど・・・大丈夫だよね！

「えつひ、じる。・・・だよね?」

「ええ！ええっと、名前と寮をお願いします」

「あ、はい。ケイト・ファーマー、ローレン・ハバード、ロバルド・ピットリー、スク・コワノフ、マーク・スコント。レイブンクロウ

最初に入ってきた女の子が答えた。

「えー・・・・・ありがねー」**カサカサ**。『ハルヒ~

「支那」

あ、ドーセット！スコーピウス！！

「あれ、早いね」

「Hぐぐ・・・それにしても、テレサかわいーー！」

「んもうー・わたしたち6人、みんなこんな格好だもん」

「あ、そつなの?見たーいー！」

「奥の方に居ると恥づよー・・・えーと、OK!入つてー！」

「あつやどーー」 「わざわざーー」

「Hたばんはーー」

「Hううでしょ?」

「あ、ちよつと氣が強そつ・・・

「はい、名前と寮お願いします」

「えーとね。Hミリー・ヒリングトン、サーラ・ブレインブロッヂ、レイチャル・Hランよ。アンタたちは自分で言つてね」

「あ、OK!えつと、ウイリアム・ファントン、チャート・スリガントン、ジャック・フィーウィット、ザック・バングリー。みんなハッフルパフだ」

「はー、ありがとウザりますー！」

それから、どんどんどんどん・・・それはもう、ぞろぞろと来た。

グリフィンドールの同級生も皆来てくれたし、リサも自分の友達たくさん連れてきてくれたんだ！

合計G=59人、R=51人、H=38人、S=14人。

うへへついっぱい居るなあ

どんだけ知り合い居るんでしょうか・・・

パーティー！ “メンバー”（後書き）

いえ～い ジニー ですよん

「雑談」「ナーナー

ジ「ひわつす～ジニー です

「 テ「テレサで～す！」

「 テ「ヘえ」

ジ「昨日はサイゴーだったよお～！」

ジ「あんねあんね～図書委員こゆき（ドーセット）となつたんだ
あ～！」

テ「ふうん」

ジ「あ、ひびひひびひわわわわ」

テ「は～い！で、今日のゲストは～？」

ジ「・・・・・えつと、今日は悪戯大好き フレッドちゃん！」

フ「俺をちゃんと付けすんな！」

ジ「いーじゃん別に」

フ「くそつ

テ「ジニーは自由気ままだからねえ」

フ「ある意味キャラリンよりこねー」

ジ「ええっ！？キャラリンはめっちゃいい人だよ？ウチの6人組で一番まともだよ！？」（テレサ&デーセット&アイリス&クラウド&リサ&キャラリン）この作品のモデルなんですよ～w）」

テ「だつて、グリフィンドールでも一番まともだもん

ジ「確かにそうだね～！」

フ「で、次は？」

ジ「んとねえなんかパーティー長くなりそうだなあ一つトラブル起こるし・・・」

テ「へえ～」

フ「な、俺、来た意味あんのか？」

ジ「さあ？しーらない！」

テ「はいはい～！ことでバイバイ！」

ジ「じゃね～」

フ「次俺出ぬのこつだ？」

パーティー！ “食事”（前書き）

いやっほう！今日は妹の運動会！

パーティー！ “食事”

「全員来た？」

最後の確認でジェームズがリストを覗き込む。

「多分、大丈夫！全員にチェックがついてるはず～」

「んじゃ、始めてOKだな！僕たちは一番奥の席で座るからさ。先座つといて。アルたちは料理運び終わったら行くし、僕たちも色々終わったら行くしさ」

「分かった！・・・」の紙びりすればいい？」

「あ、貰つとくよ」

「ありがと！」

ジェームズに紙を渡し、奥の席まで走る。

現在は8：30

それと同時にジェームズとフレッドが壇上に上った。

「レディース アンド ジョントルメイン！今日は僕たちのパーティーに来てください、ありがとうございます！」

「今からウエイターたちが料理をお運びいたします。」

そう言つた途端、5人とキャサリン、ビクトワールが出てきた。
みんなあの服を着ている。

え、演出すじいねえ

ペコーペコーとあちこちで口笛が沸く。

7人がそれぞれに運び、また戻つては運び・・・

あー、重そうー。こっちでよかつた

あつちこつちで「あの子かわいーー!」「写真撮つてもいいのかな?」
とこゝう女子の声と「な、あつちの子かわいくね?」「俺はあつちの
子がタイプだな」という男子のコソコソした声が聞こえる。

「メインの料理はキャサリン・バー・コートとビクトワール・ウイー
ズリーの手作りでござります!」

「えーー!」「すつじーー!」「ほんのをー?」

「うつそー!スゴイスゴイー!」

そして、大分食事を運び終わり、7人がこっちに帰つてきた。

「あー疲れたあ

「重かつた・・・」

「テレサはいいよな、楽で」

「うん！楽だった」

「あ、何それ～自慢～？」

「うん、じま～ん」

「え～…」

「アハハ」

「みなさん？準備はいいですかー？では、グラスを持ち上げて…」

「

壇上の2人が静かに言った。

「「メリークリスマス！！」

『 『 『 『 メリークリスマス！……………』』』』

ワイワイガヤガヤとみんながご飯を食べたり、雑談したりし始めた。
(みんなには前もって夕食あんまり食べるなって言ってたみたいね)

わたしたちも田の前の食べ物に手を伸ばす。

「あつ・・・美味しい！？」

・・・おいしい

「これ、2人が作つたんでしょ？」

「みんなのよく作れるな・・・」

ホントに美味しい！

みんなから賛美もすこし

卷之三

家が二たねあ

はにかみなかひありかどニ
とお祈を言ひ二人

「はい作つたから、雑になつちゃつたかな」と思つてたんだけ
ど・・・」

「ええっ！？」「これで雑！？」

「丁寧に作つたらもつと凄いって」と！？

「ホントにスゴイよ・・・」

8人で褒めちぎる。

「・・・フレッシュに壊められたのはじめてかも」

キヤサリンがボソッと言った。

・・・・・！？！？

「「「はあ～！？」」「

「フレッド！こんな完璧な人を褒めたこと無いって！・・・

「・・・僕も見たことねーや、3年間一緒に居るけど。」

8人でキヤサリンとビクトワールを褒めた後、次は7人でフレッドを攻めまくる。

「オレサマは人を褒めるのは嫌いなのだ！！ハツハツハッ！」

・・・・・・・・・・・・

「開きなおんな・・・・

「それ、ハツキリ言つておかしいと思うよ？」

「いいのさーいのせーーー！」

「・・・キヤサリン、こんな奴相手にしないほうがいいわ

「・・・1年生の時から心得てる。」

パー・ティー！ “食事”（後書き）

やつほ～ジニーでえす！

今日もたのしもー！

（雑談）

ジ「いえ～す！ジニーちゃん」

テ「こんにちは～～」

ジ「モーヤ・バ・イ～！」

テ「あ、そつなの？良かつたね」

ジ「最近テレサがヒドイ・・・」

テ「アハハハハハハハ～～」

ジ「はい、今日のゲストは・・・クライドと犬猿の仲！？ローズだよ～」

ロ「え！？私とクライド、犬猿の仲なの！？」

テ「初めて知った・・・」

ジ「ま、ロンとハーマイオニーみたいな感じ？」

ロ「は、はあ・・・」

テ「ますます分からない・・・」

ジ「分からなくて」――

口「・・・が、いつか」

ジ「そいつ一諦めちやべー」

テ「なんか面倒になつたわ」

口「だね・・・」

ジ「ほり、・・・が多こみー」

テ「いや、ジニーがそつしてるんでしょ」

口「テレサと回じへ」

ジ「勝手にそつてなーウチの頭の中ではテレサたちが勝手に動くんだもんーしあうがないじゃんー」

テ「へ、へえー」

ジ「勝手に手が動くんだもん」

口「あ、そ」

ジ「テレサよりビドイ人がここ・・・へへ」

テ「ドンマイー（棒）」

ジ「やつぱりヒディよ」

口「へえ～で、次は？」

テ「パーティーのお菓子バーのはず…」

口「ドーセットが興奮しちゃうヤツね」

ジ「…・次回もよろしく」

テ「またね！」

口「次はいつ会えるかな～？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3345w/>

輝く花

2011年10月9日19時32分発行